1996 AIDS文化フォーラム in横浜

報告書

第4回かながわエイズポスターコンテスト　中・高生の部　入賞作品　（佳作）　中川　沙希

日時：1996年8月9日（金）～11日（日）

場所：（財）神奈川県国際交流協会会議室

主催：1996AIDS文化フォーラムin横浜組織委員会

共催：神奈川県　後援：横浜市／川崎市／横須賀市

1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜

実施報告書

目　次

1ページ　：ご挨拶
2　：「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施要項
「ＡＩＤＳ文化フォーラム概要(第1回、1994年)」
「ＡＩＤＳ文化フォーラム概要(第2回、1995年)」
：会場平面図、会場周辺図、同時開催行事、周辺行事
4　：会場写真
6　：ＡＩＤＳ文化フォーラムが目指すもの
7　：ＡＩＤＳ文化フォーラム参加団体概要
9　：実施報告プログラム
10　：プログラム総括表
11　：　自分らしく生きる～女性のためのワークショップ～
12　：　ＡＢＣキルトワークショップ－キルトを作りながらエイズを考える－
13　：　保健所のＡＩＤＳ対策
14　：　絵本で話そうＡＩＤＳ
15　：　Ｈ・Ｉ・Ｖｏｉｃｅ朗読ワークショップ
16　：　インターネットとパソコンによるＰＷＡ／Ｈ支援活動
17　：　市民がエイズを考える
18　：　Ｈ・Ｉ・Ｖｏｉｃｅ劇場
19　：　生きる　－positive^{s}－
20　：　“ＡＩＤＳ”を生きる人々の気持ち
21　：　つ・く・る・性教育～「性」を語るためのグッズ製作～
22　：　岩室をこえた？！［Ｒ指定］
23　：　電話によるＡＩＤＳ相談のデモンストレーション　－ロールプレイによる－
24　：　ＰＷＡ／Ｈと法的サポート
25　：　薬害エイズにみる市民運動
26　：　Ｔａｋａｙｏｓｈｉ青春の旅
27　：　テディベアワークショップ
28　：　薬害エイズって何が問題なの
29　：　性風俗とＨＩＶ／ＡＩＤＳ
30　：　訪問（在宅）サービスを考える
31　：　プライマリケアとＡＩＤＳ
32　：　Ｓａｆｅｒ　Ｓｅｘ　Ｗｏｒｋｓｈｏｐ　ｆｏｒ　Ｇａｙ　Ｍｅｎ
33　：　マザーテレサ・その活動
34　：　従業員の医療情報は誰が管理すべきか？
35　：　ＰＷＨ／Ａを支える医療機関とＮＧＯ
36　：　同性愛者の人権とＡＩＤＳ
37　：　性産業と外国人女性
38　：　地域におけるケアを考える
39　：　共生へのいちばんの近道はＰＷＡ／ＰＷＨの人々と友だちになること
40　：　女性とＡＩＤＳ
41　：　エイズーいま、何をどう伝えるかー
42　：　ＡＩＤＳ地方議会
43　：　石田吉明写真展／いのちの輝き
45　：ＡＩＤＳ文化フォーラムへの取り組みーかながわエイズボランティア育成講座－
46　：1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜入場者感想
47
～　：資料編
53
54　：「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施報告

ご　挨　拶

１９９６年8月9日から3日間、3年継続して「ＡＩＤＳ文化フォーラム　ｉｎ　横浜」が開催できたことを皆様に感謝すると共に、喜びを分かち合いたいと思います。

このフォーラムは市民による市民のための手づくりフォーラムとして、手弁当型で運営されました。プログラムは当初予定したコマ数を超え、３４のプログラムを実施することができました。それぞれのプログラム主催者はＮＧＯとして、あるいは保健医療現場の第１線で活躍されている専門家を中心に、昨年のフォーラム以降に積極的な活動を展開されたボランティアや学生の方の参加も多く、幅が広がったことはこの「ＡＩＤＳ文化フォーラム」の成果であり、うれしい限りです。

１９９６年度の入場者は3日間で１，６００名となり、県内はもとより、県外（山形、埼玉、千葉、東京、滋賀、京都、大阪、兵庫、愛媛、福岡、宮崎、など）からの参加があり、ＡＩＤＳ文化フォーラムが定着し、全国的にも認められてきた表れだと確信いたします。

会場の運営にあたっては、約７０人の市民ボランティアと２０人の組織委員、実行委員がボランティアとしてこのフォーラムを支えてくれました。今年も会場を無料提供して下さった㈶神奈川県国際交流協会、共催の神奈川県、後援の横浜市、川崎市、横須賀市をはじめ、多くの人々や団体・行政の賛同と支えにも感謝申し上げます。

ＡＩＤＳをめぐる社会状況が変化し、ＡＩＤＳに対する関心の度合いが低下していると思われる中で、これだけ多くの人々が参加してくださったことは心強い限りでした。しかし、ＨＩＶ／ＡＩＤＳに関するニーズは多様化しています。ＨＩＶに感染している人々のニーズにも応えられ、これから新にかかわりを持つ方から、すでに専門的にかかわりを持っている方など、幅広い対応が求められています。その意味では、今後さらなる広がりを図るよう努力したいと思います。

今回、フォーラムが成功裡に終了できた喜びをすべての方々と分かち合うことができました。心より感謝申し上げます。

このフォーラムを機会に、参加された方がさらなるネットワークを形成し、「ともに生き連帯する」社会づくりが進むことを願ってやみません。皆様の今後の活動に期待しながら「１９９６ ＡＩＤＳ 文化フォーラム　ｉｎ　横浜」の報告とさせていただきます。

１９９７年3月1日

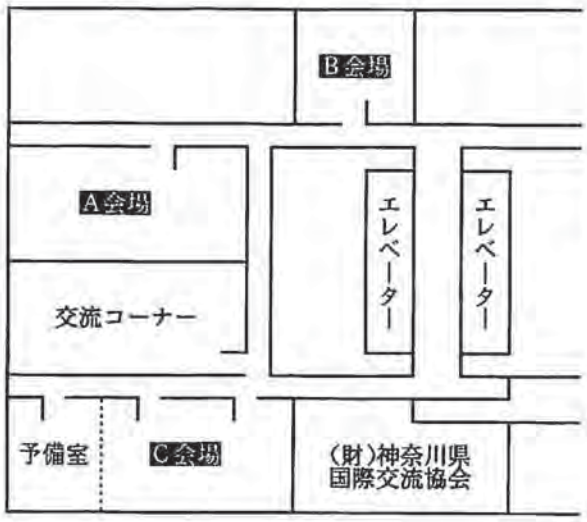
「１９９６ ＡＩＤＳ 文化フォーラム　ｉｎ　横浜」組織委員会委員長　吉村恭二
実行委員会委員長　広瀬　誠

「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施要項

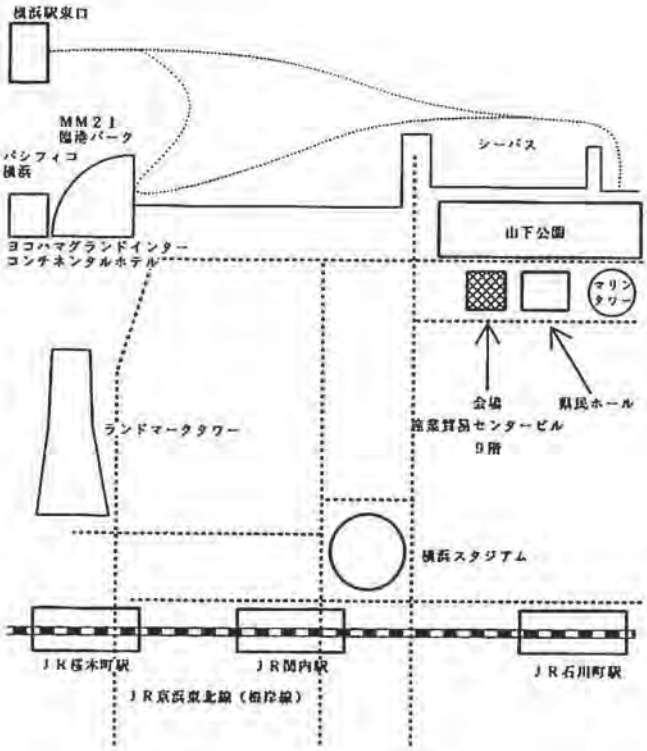
名　　称：「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」
開催期間：1996年８月９日～11日（３日間）
開催場所：㈶神奈川県国際交流協会会議室
テ　ー　マ：「ともに生きるから連帯へ」
目　　的：①地域に根ざしたＡＩＤＳサポート
　　②地域で支える人々への啓発活動
　　③ＮＧＯのＰ.Ｒ.の場
ジャンル：１．社会とＡＩＤＳ
　　２．文化とＡＩＤＳ
　　３．マルチメディアとＡＩＤＳ
　　４．ボランティアとＡＩＤＳ
　　５．心とＡＩＤＳ
　　６．生きる
　　７．人権とＡＩＤＳ
　　８．セクシュアリティとＡＩＤＳ
　　９．女性とＡＩＤＳ
　　10．Ｈ★とＡＩＤＳ
　　11．教育とＡＩＤＳ
　　12．医療とＡＩＤＳ
開催方法：・当日の参加はすべて手弁当、入場無料である。
　　・発表に必要なものは、参加側で準備する。
　　・日程・時間帯・場所の調整は、実行委員会で行う。
プログラム構成：①領域をカバーする
　　②実行委員会の指導するプログラム
　　③一般募集のプログラム
留意点：①高校生や青年が参加できる工夫
　　②専門家の為のプログラムより市民が参加できる工夫
　　③ターゲットを絞ったプログラムの工夫
　　④学校関係者他の参加
　　⑤命と心のバランスのある内容
　　⑥エイズＮＧＯ情報支援
主　　催：「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」組織委員会
共　　催：神奈川県
後　　援：横浜市　川崎市　横須賀市
事務局：〒231 横浜市中区常盤町1-7 横浜YMCA内
　　ワールド・コミュニケーション・センター

ＡＩＤＳ文化フォーラム概要（第1回、1994年）
日　　時：1994年8月6日～14日
場　　所：神奈川県国際交流協会会議室、他
主　　催：ＡＩＤＳ文化フォーラム組織委員会
共　　催：神奈川県
後　　援：横浜市、川崎市、横須賀市
実　　施：ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会
プログラム：会場内58　会場外4
参加者数：4,305名
ジャンル：ジェネラル、ＰＷＡ、医学、社会問題、若者、同性愛、ボランティア、
　　海外交流、ビジュアル
関連事業：第１０回国際エイズ会議(パシフィコ横浜)、等

会場平面図



会場周辺図



周辺行事(1996年)

神奈川県／

夏のレッドリボン月間　：7月16日(火)～8月15日(木)

世界のAIDSﾎﾟｽﾀｰ・資料展：8月5日(月)～18日(日):かながわ県民活動サポートセンター

横浜市／

横浜エイズウィーク'96　：8月2日(金)～ 4日(日):相鉄ジョイナス４Ｆ自然の広場

川崎市／

かわさきAIDSﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ講座　：7月13日(土)～8月31日(土):川崎市健康・検診センター、等

横浜YMCA／

かながわｴｲｽﾞﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ育成講座　：7月13日(土)～9月 7日(土):横浜YMCA他

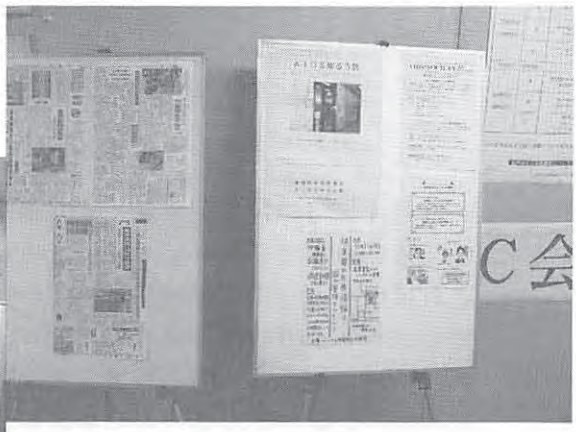
ＡＩＤＳ文化フォーラム概要（第2回、1995年）
日　　時：1994年8月11日～13日
場　　所：神奈川県国際交流協会会議室、他
主　　催：ＡＩＤＳ文化フォーラム組織委員会
共　　催：神奈川県
後　　援：横浜市、川崎市、横須賀市
実　　施：ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会
プログラム：31
参加者数：約2,200名
ジャンル：生きる、医療、心、ボランティア、社会、宗教、セクシュアリティ、文化、教育、薬害、企業、人権
関連事業：第１４回日本思春期学会(11日(金)～12日(土)：パシフィコ横浜)
第１２回世界性科学学会(13日(日)～16日(水)：パシフィコ横浜)、等

記録写真

フォーラムを運営した実行委員やボランティアの面々。

事務局の一角では、
ボランティアや講座主催者、
参加者達の談笑風景が
見られた。

薬害原告の故石田吉明氏の
写真展も併設された。



啓発パンフレットや
団体、施設、催しなどの
情報提供コーナー。

閉会式ではカナダ・バンクーバーにて開催された第11回国際エイズ会議の報告も行われた。

ＡＩＤＳ文化フォーラムがめざすもの

１９９４年８月に開催された国際エイズ会議を機会に第１回ＡＩＤＳ文化フォーラムが行われた。その時以来、横浜ＹＭＣＡがこの事務局を引き受け、第３回まで実施してきた。１年目の場合は国際会議と同時並行開催でこのフォーラムへの参加者は約4,300 名であった。２年目は2,200 名、そして第３回目は1,600 名であった。今回は、社会的にも薬害エイズ問題がクローズアップされ、マスコミも例年のような興味をこのフォーラムに示さなかった。しかし、日本全体、世界的にも、ＨＩＶ患者・感染者は増加し、社会的には問題を含んでいる。ＡＩＤＳ文化フォーラムは、そうした状況化で開催された。

３年目の継続は、神奈川県のみならず東京、千葉、埼玉、静岡ばかりでなく、全国的に参加者の広がりをみせている。また、神奈川県内で誕生したエイズ関係のグループも成長している。その証拠にフォーラムへの参加グループとして登場している。

もともとこのフォーラムは、民間の手で、民間のために行ってきたフォーラムである。しかし、この陰で支えた方々、団体があってこそ今日まである。快く組織委員を引き受けて下さった方々、財政的に支えて下さったカトリック横浜司教区福祉委員会、カトリック山手教会、全期間会場を提供して下さった神奈川県国際交流協会、広報を協力して下さった神奈川県衛生部、その他多くのひとびとの支えがあったことを感謝し、報告しておきたいと思います。４年目の開催を実現しつつ。すべてに感謝。　　（事務局：長沢勲）

９月４日号のＮｅｗｓｗｅｅｋ日本語版をご覧になった方は、きっと、このタイトルを覚えている事でしょう。＝子供たちが性の奴隷に・世界に広がる「いちばん汚い商売」＝これはベルギー少女連続誘拐事件の事をさしています。しかしアジア諸国では、すでに女性の買春・子供の人身売買・ペドファイルの隠れた拠点と書き始めるとキリがない程です。ベルキーで起きた「史上最悪」と呼ばれる事件を通して、買売春の実態を国際的に波紋を投げかけ、ようやく恐ろしい事実が表面化しました。そして共に、貧困と呼ばれる国への差別も明らかになった事でもあります。これはとても悲しい事実です。ＡＩＤＳ文化フォーラムでは、女性のプログラムがしっかりと確立しています。そこへ参加した女性たちへ「ＡＩＤＳは誰にでも感染するが、正しい知識によって予防できる病気」である事と同時に「知識のない人によって弱者を感染させる事がある病気」である事を理解する機会なったら、なによりです。　　（実行委員：久慈美代）

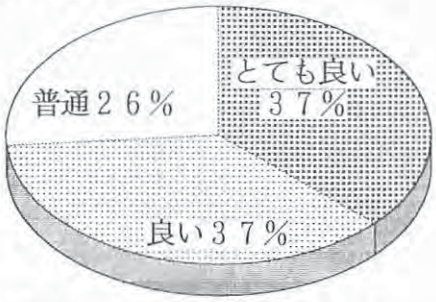
横浜で第１０回世界エイズ会議が開催されてから２年が経過しました。全国的にＨＩＶ感染者／ＡＩＤＳ患者を受け入れる医療機関も増え、エイズ教育も少しずつ浸透して来ました。しかし、感染者の数は相変わらず増え続けており、未だ偏見や差別も決して少なくありません。その一方でＨＩＶ／ＡＩＤＳにかかわるマスコミ報道が減少し、この問題を多角的に検討する機会もほとんどないのが現状です。ＡＩＤＳ文化フォーラムはエイズ問題を学習し考える上で、今や全国でもっとも有意義な場となっていると言っても過言ではありません。その証拠に、今回のフォーラムの内容をそっくりそのまま講師として招きたいとして県内はもとより、遠くは宮崎県や岐阜県から依頼が来ました。これからもこのように全国的に高い評価を受けているこぼフォーラムがさらにレベルアップし、皆様の期待に沿えるように努力したいと思っています。　　（実行委員：岩室紳也）

ＡＩＤＳ文化フォーラム参加団体アンケートの概要

参加２７団体のうち、回答１９団体（回答率70.4%）

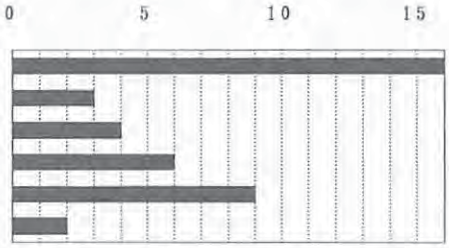
Ⅰ　1996 AIDS 文化フォーラムの全体評価をお願いします。

評　　価	件数	比率
①とても良い	7	37%
②良い	7	37%
③普通	5	26%
④不満	0	－
⑤とても不満	0	－

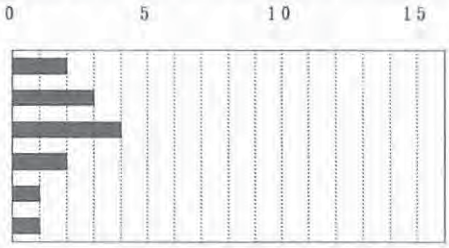


Ⅱ　AIDS文化フォーラムに参加する、メリットとデメリットをお書きください。

1.　参加するメリット	件　数
①団体活動のＰＲの場として有効	１６
②会員拡大につながった	3
③新しい情報が手に入った	4
④ワークショップ等の実験ができた	6
⑤他団体との交流が生まれた	9
⑥その他	2

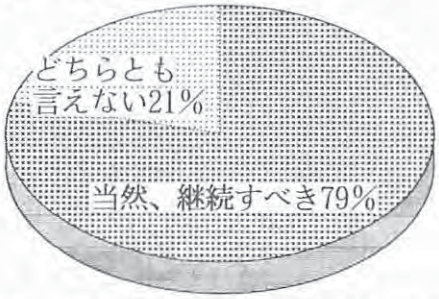


2.　参加するデメリット	件　数
①講師や進行役の負担が大きい	2
②運営スタッフの負担が大きい	3
③講師謝金や交通費の負担が大	4
④ﾁﾗｼ 作成や通信費の負担が大	2
⑤本来活動が手薄になってしまう	1
⑥その他	1



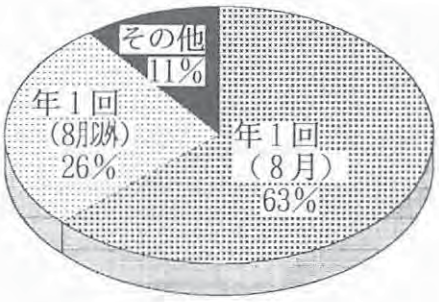
Ⅲ　AIDS文化フォーラムは今後も継続すべきだと思いますか？

継続すべきか？	件数	比率
①当然、継続すべき	１５	79%
②どちらとも言えない	4	21%
③継続する必要はない	0	0％



Ⅳ　AIDS文化フォーラムの開催回数と時期について、一番相応しい時期はいつですか？

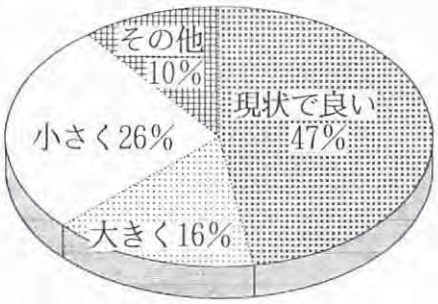
開催回数と時期	件数	比率
①年１回（８月）	１２	63%
②年１回（８月以外）	5	26%
③年２回	0	－
④２年に１回	0	－
⑤その他	2	11%



Ⅴ　AIDS文化フォーラムの規模とプログラム数は適正と思いますか？

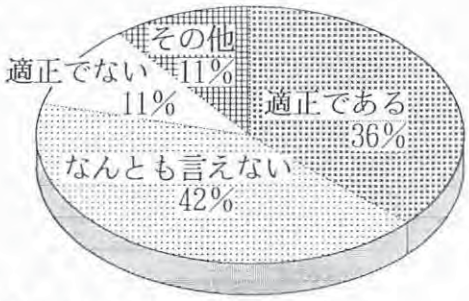
（現状規模は3日間3室33プログラム）

規模とプログラム数	件数	比率
①現状で良い	9	47%
②大きくすべき	3	16%
③小さくすべき	5	26%
④その他	2	10%



Ⅵ　AIDS文化フォーラムのプログラム構成は、適正と思いますか？

プログラム構成	件数	比率
①適正である。	7	36%
②なんとも言えない	8	42%
③適正でない。	2	11%
④その他	2	11%

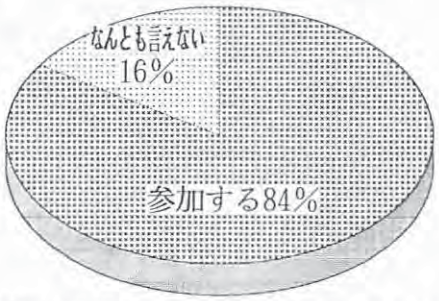


○こんなプログラムがあればいいなと思うものを、何でもお書きください。

☆規模の大きな特別フォーラム
☆ＮＧＯ全体でのディスカッション
☆親子で参加できるプログラム
☆会期中展示できるキルト展
☆医療の最新状況についての報告
☆ＰＷＡ間の情報交換
☆在日外国人、国際保健的なもの
☆マスコミとエイズ報道
☆映画上映（「フィラデルフィア」「マイ・フレンド・フォー・エバー」等）
☆テーマを決めた参加グループのジョイントプログラム
☆各団体、当日参加者の１０分ＰＲコーナー
☆全国ＮＧＯ活動紹介ポスターセッション
☆アウトリーチプログラムの実践と成果
☆医療と地域、NGO、行政のグループケアのための 意見交換
☆医療チームの発表、看護チームの発表
☆インホォホムドコンセント、セルフヘルプ、患者の権利　等

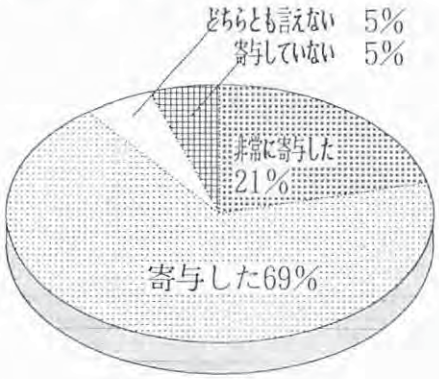
Ⅶ　来年も、開催するとしたら参加しますか？

来年開催したら	件数	比率
①参加する	１６	84%
②なんとも言えない	3	16%
③参加しない	0	－



Ⅷ　このフォーラムは、日本や神奈川県のAIDS対策の推進に寄与した思いますか？

AIDS対策に寄与したか？	件数	比率
①非常に寄与した	4	21%
②寄与した	１３	69%
③どちらとも言えない	1	5%
④寄与していない	1	5%
⑤逆にマイナス	0	－



実施報告プログラム

プログラム総括表

「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」～共に生きるから連帯へ～のプログラム総括表をここに示します。日程順にプログラムナンバーを付け、タイトル、主催者名を記載してあります。次ページ（ｐ１１）からは、各主催者から、１プログラム１ページで報告していただきましたのでそのまま転載いたします。（一部修正し様式をそろえた所もあります）

☆プログラム☆　　（○　内の数字がプログラムNoです）

時　間	９日（金）	１０日（土）	１１日（日）
10時00分 ｜ 12時00分		⑩ "AIDS"を生きる人々の気持ち （HIVと人権・情報センター）	㉒ プライマリケアとAIDS （HIVと人権・情報センター）
		⑪ つ・く・る・性教育 ～「性」を語るためのグッズ製作～ （横浜エイズ勉強会）	㉓ Safer Sex Workshop for Gay Men （ぷれいす東京）
	開会式 （12時45分～13時00分）	⑫ 岩室をこえた？！ ［Ｒ指定］ （SAY NETWORKっぽいかもしんない）	㉔ マザーテレサ・その活動 （グループPAZ）
13時00分 ｜ 15時00分	① 自分らしく生きる ～女性のためのワークショップ～ （レッドリボンクラブ）	⑬ 電話によるAIDS相談のデモンストレーション －ロールプレイによる－ （横浜いのちの電話）	㉕ 従業員の医療情報は誰が管理すべきか？ （HIV不当解雇訴訟支援団）
	② ABCキルトワークショップ －キルトを作りながらエイズを考える－ （ABCキルトの会）	⑭ PWA/Hと法的サポート （『エイズ予防法』を考える会）	㉖ PWH/Aを支える医療機関とNGO （AIDS & Society 研究会議）
	③ 保健所のAIDS対策 （あのね広場）	⑮ 薬害エイズにみる市民運動 （HIV訴訟を支える会横浜）	㉗ 同性愛者の人権とAIDS （レズビアン・ゲイ・ネットワーク）
15時30分 ｜ 17時30分	④ 絵本で話そうAIDS （あのね広場）	⑯ Takayoshi青春の旅 （HIVと人権・情報センター）	㉘ 性産業と外国人女性 （横浜YWCA・京都YWCA）
	⑤ H・I・Voice朗読ワークショップ （H・I・Voice・ACT）	⑰ テディベアワークショップ （メモリアル・キルト・ジャパン）	㉙ 地域におけるケアを考える （ぷれいす東京）
	⑥ インターネットとパソコンによるPWA/H支援活動 （ライフ・エイズ・プロジェクト：LAP）	⑱ 薬害エイズって何が問題なの （薬害エイズを追及する市民ネットワーク）	㉚ 共生へのいちばんの近道は PWA/PWHの人々と友だちになること （北沢杏子）
18時00分 ｜ 19時30分	⑦ 市民がエイズを考える （AIDSネットワーク横浜）	⑲ Takayoshi青春の旅 （HIVと人権・情報センター）	㉛ 女性とAIDS －いやしと再生のワーク－ （吉永陽子）
	⑧ H・I・Voice劇場 （H・I・Voice・ACT）	⑳ 性風俗とHIV/AIDS （Campus AIDS Interface）	㉜ エイズ －いま、何をどう伝えるか－ （岩室紳也）
	⑨ 生きる －positive³－ （パトリック & 紳也）	㉑ 訪問（在宅）サービスを考える （AIDSケア・プロジェクト）	㉝ AIDS地方議会 （エイズアクション）
			閉会式・交流パーティ （19時30分～20時00分） （Ｃ会場：参加費無料）

プログラムをより深く理解していただくため、対象者を限定するものがあります

展示プログラム　㉞ 石田吉明写真展8月9日～11日

Ｎｏ．１	自分らしく生きる　－女性のためのワークショップ－

主　催／ かながわレッドリボンクラブ

講　師／ 鹿股　久美子・沼尾　貴子・古川　友子

ねらい

女性自身が自分の性に対し積極的に「自己決定」していくことがこれからの時代には必要になってくると思います。そのために自分の性をタブー視することなく、パートナーに伝えることが大切になってきます。そのことはすなわち、自分の「生き方」に対して積極的になることにつながってきます。このワークショップではセックスについて語り合い、「恥ずかしさ」や捕らわれた観念を取り除いていくことを目的としました。

参加者数：２４人

ながれ

１　ワークショップの主旨の説明及び注意事項（鹿股）

２　セックスについて口にしにくい言葉を一斉にとなえる（古川）

（セックス、バギナ、クリトリス、コンドーム、マスターベーションなど）

３　グループワーク（鹿股、古川、沼尾）

・３グループに分かれる（１グループ７；８人）

・セックスについての自分のイメージを画用紙に描き、またイメージを言葉にする

・それぞれに自分のイメージを説明していく

・続いて自分にとっての「ＳＥＸパートナーはどのような存在であるか」を語り合う

４　まとめ

これからは「自分の体は自分のもの」「自分の生き方は自分できめる」というように、自分をかけがえのない存在と感じ、自己決定を行っていくことが大切になってきます。今回のワークショップをきっかけに、自分自身で性を選択していってほしいと思います。（沼尾）

感　想

・自分とは違う世代（母親の世代）の人の性に対する話が聞けました。

・性について普段このように語られる場がないので、このような機会を持ててよかった。

・なかなか自分を開いて話すことができなかった。

・エイズに関することを期待していたのだがエイズに関して触れられず、もっとエイズの話を交えてほしかった。

・「自己決定」「自己選択」ということの大切さを知りました。

連絡先

かながわレッドリボンクラブ

〒231

神奈川県横浜市中区常盤町1-7

横浜ＹＭＣＡワールドコミュニケーション・センター内

”性を語ろう“

代表・鹿股　久美子

Ｎｏ．２	ＡＢＣキルトワークショップ

主　催／ ＡＢＣキルトの会

ねらい

ＨＩＶ／ＡＩＤＳ感染の子供たちやエイズで親を失った孤児たちに贈るベビー・キルト作りを通してエイズ問題を考えるきっかけになるよう、この運動の輪を広げていきたい。

参加者数：３５人

ながれ

１　ＡＢＣキルトについて説明

出来上がったキルトはＡＢＣキルトの会ＪＡＰＡＮに集められ、日本で作られたキルトは主にアジアの国に贈られる。特にタイではエイズ患者が急増し、贈られるキルトの大半はタイの病院や施設に向けてである。

２　参加者のＡＢＣキルト活動

・川崎市高校教師　　生徒たちによるキルト制作がすでに行われ、現在１１枚が完成

・埼玉県の中学教師　　生徒たちに興味が持てるものとしてＡＢＣキルトを提案したい。

・甲府市のＷＩＴＨ　ＹＯＵのメンバー　　ＡＢＣキルト活動をしている人を知っているので、同じようにキルト作りのワークショップやキルト展を企画したい。

３　キルト制作

４枚（途中）

４　終了時、かにた婦人村（館山市）の人たちがエイズの孤児たちのために学校をつくるという新聞を紹介。ＡＢＣキルトＪＡＰＡＮでも現地の様子を知るためのスタディーツアーがあり、今後はタイの保育園の支援活動もしていく話をした。

感　想

（参加者）

一人では大したことは出来ないけれど沢山の人が協力してやれば出来るキルト作りは面白かった。ボランィア活動に初めて参加するいいきっかけになった。

（主催者）

誰でも気軽に参加出来ることもあって様々な人たちが参加してくれ、一針一針縫いながら人と人との交流もあって良かった。

連絡先

ＡＢＣキルトの会

横浜支部　上村春子
横浜市港南区日限山3-1-11
TEL 045-844-8124

川崎支部　梶ケ谷雪香
川崎市幸区下平間180-9
TEL 044-522-1807

No. 3	保健所のＡＩＤＳ対策

主　催／ あのね広場　　協　力／ 神奈川県衛生部保健予防課、横浜市衛生局保健部

講　師／ 神奈川県相模原、大和、横浜市青葉、磯子、戸塚、各保健所職員

ねらい

地域住民の健康に携わり、ＨＩＶ抗体検査も担う保健所での役割と可能性を模索しようと企画した。保健所はＰＷＡや感染の不安を持つ人と、必要な資源や人材とのパイプになれる機関である。また、感染の予防対策をより効果的に推進し、ＰＷＡを支える体制作りなど、地域ぐるみの働き掛けの核ともなっていくことができる。各保健所で行なわれている様々な取り組みを紹介、その成果や反省をそれぞれが現場へ持ち帰り活かすための具体的な討議へ展開していこうと対象を保健所及び医療関係者へ限定した。

参加者数：５９人

ながれ

神奈川県、横浜市内の各協力保健所職員から、それぞれのＡＩＤＳ対策の状況を聞く。

［対象別啓発の例として］

◇青葉保健所／幼年期の子供と母親を対象にしたＡＩＤＳを含む性教育を布絵本で展開している様子を紹介。

◇磯子保健所／思春期を対象（主に管轄内の中高校）とした取り組みを紹介。同世代間の相互教育（Peer Education）への期待。

◇戸塚保健所／各学校の協力を得ながらＰＴＡを対象にしたＡＩＤＳ啓発の紹介。

［地域に根ざす取り組みの例として］

◇相模原保健所／保健所を核にした市民活動を推進。ＰＷＡへのケアサポートのニーズへの対応も行いはじめている。

◇大和保健所／教育や医療、商工関係の地域機関等との連絡会などをベースにコーディネーター的役割を目指している。

［保健所対策への提案］

◇検査対応について／文字情報の有効性（必要な時に読み返すことができる）、混乱の整理（混乱の未処理が不安を生む）、対応の簡潔化（対応窓口のたらい回しはその都度のカミングアウト）等など。

◇啓発対策について／対象に応じた対策（必要とされる情報は対象により異なる、届かないメッセージは役割を果たさない）等など。

感　想（主催者）

・配布資料が不足し、会場ボランティアへコピー作業を終始お願いする結果となった。

・各保健所からの発表に終始し、具体的な討議や情報交換へ発展できなかった。主催側の事前準備の不足に尽きる。

連絡先

あのね広場

ひとりひとりができることーを目指した緩やかなネットワーク

TEL 06-574-3118（西浦）

Ｎｏ．４	絵本で話そうＡＩＤＳ

主　催／ あのね広場　　**講　師／** 森孝子、西浦うらら

ねらい

より親しみやすい表現と言葉でＡＩＤＳを伝えようという試み。布で作られた絵本を中心に、講師と聴衆、教える側と教えられる側という形ではなく、参加者の経験や意見を分かち合うことに重点を置いて対話するワークショップ。ごく一般の母親が家庭で伝えられるＡＩＤＳについて、を目指して昨年の「免疫のお話」に続き、「生（命）と性」をテーマに行なった。

「性教育という言葉ってセックスを連想してしまうけど、それだけじゃないかなと思っています。性とは女性であること、男性であること、人であること、そして大切な生きること。自分らしい生き方までも含めた広い意味合いの言葉ではないかしら。性という字を分解すると心が生きると書きます。－森孝子」（当日配布資料より）

参加者数：４０人

ながれ

ラウンドテーブル形式で進行。主催側の自己紹介と趣旨説明から参加者の自己紹介へ。布絵本現物を自宅に忘れるという主催側の大きなミスで、「生（命）と性」については写真によって進行した。そのこともあり参考のために持参していた免疫の絵本を、実物の説明も兼ねて簡単に話す。その後全体を含めたディスカッションに移行。

「免疫のお話」

からだを守る免疫の働き、ＨＩＶに感染すると免疫機能にどんな変化があるのか、免疫が低下するということは？、免疫低下した感染者へ雑菌を運ぶのは健康な私たち等など。

「生（命）と性」（今回は女性のからだのしくみについて）

生命の始まり（精子と卵子の出会い）から出産（母と子の共同作業）、そのプロセスの不思議等など。

感　想

参加者の感想より／

・参加者には保健婦や助産婦、教員もおり、性教育の基盤が薄い中でＡＩＤＳと性について子供たちへ伝えていくことに苦労している。

・男性性器には名称があり話しやすいが、女性性器の名称は曖昧で表現しにくい。

会場ボランティアの感想より／

・背景や年代、性別の異なる人々が集い話すことは、刺激的であり有意義だと思った。

・性に対する話しは家庭でタブー、ＡＩＤＳについても話しにくい。自然に話せる家庭にしたいと思う。

・自分の子どものために絵本を作りたい。

主催者として／　企画の要である肝心の絵本を忘れるという失態で、折角参加してくれた人たちに本当に申し訳ない結果となってしまった。

連絡先

あのね広場

ひとりひとりができること－を目指した緩やかなネットワーク

TEL 06-574-3118（西浦）

No. 5	朗読ワークショップ

主　催／ H.I.Voice Act　　協　力／ H.I.Voice 編集局

ねらい

感染者と未感染者が互いに理解を深めることを目的として発行されている、月刊情報誌「H.I.Voice」には、AIDSに係わる様々な人の声があり、顔があります。悩みや希望の中で生活する家族（親子や夫婦）・仲間の等身大の姿が見えてきます。

『朗読ワークショップ』とは、この「H.I.Voice」誌を「朗読」の素材として使わせてもらい、声に出して読むことで、そこにある思いを、共感を通して、自分の心と身体に取り入れる作業を行うことです。　　参加者数：４０人

ながれ

Ⅰ始めの言葉（10分）

…朗読ワークショップについての説明（◇書き手⇨読み手⇨聞き手）

・声に出して読むことの意味「言魂」（肉声が言葉に魂を吹き込む）

・書いた人の思いをそのまま自然に受け入れて欲しい（魂の震えが伝わる）

Ⅱリラグゼーション（20分）

…ＨＩＶに直接関係しない詩、短歌等、様々な文章を読んで声を出す事に慣れる。

Ⅲ輪読（H.I.Voice ﾀﾞｲｼﾞｪｽﾄより）（50分）

…H.I.Voice 誌への投稿文の抜粋を参加者が順番に読む／他の人は聞く

・30名での輪読はともすれば変化に乏しくなりがちだが、バックの音楽で感情的に落ちつき集中力も持続

Ⅳ感想（読んでみて・自分とＨＩＶ）（20分）

…お茶を飲みながら意見交換・新たな気付、仲間の存在を知る、劇場への参加募集等

感　想（参加者アンケートの一部）

・今日参加して、感染された方々の一人の人間として、どう生活しているかといった事を少しかいま見ることができた思いです。（男性・22歳・学生・所沢市）

・僕もＨＩＶ＋の一人で薬害エイズの原告をやっています。ﾎﾟｼﾞｨﾃｨﾌﾞ同士の交流の場としてこのVoice は、すごくいいな～とおもっています。（男性・20歳・会社員・杉並区）

・朗読ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを必要とする人が大勢いると思います。（女性・28歳・保健婦・諏訪市）

・どんな本を読んでも判らなかったことが理解できた。（男性・34歳・養護　・川口市）

・いろんな人が、自分の事ように感じて消化し読んでくれるということは、とても意味ががあると思う。（女性・23歳・無職・市川市）

連絡先

H.I.Voice Act

「H.I.Voice誌」を朗読することで、AIDSに係わる問題を理解し、共感と支援の輪を広げていこうと、1995年3月に高校生、大学生、会社員、主婦、公務員などで結成された市民グループ。

かながわ県民活動ｻﾎﾟｰﾄｾﾝﾀｰ／岡島龍彦
TEL045-312-1121(内2831) FAX045-312-4810

No. 6	インターネットとパソコンによるPWA/H支援活動

主催／ライフ・エイズ・プロジェクト（ＬＡＰ）　**講師**／清水茂徳（ＬＡＰ代表）

ねらい　近年注目を集めているインターネットやパソコンをPWA/H支援活動にどのように活用していけるのか。インターネットを使った情報提供、マルチメディアを利用したPWA/Hの自己表現、パソコンを使ったPWA/Hへの技能修得事業等の実例を挙げながら解説する。また、より充実したPWA/H支援活動の実現を目指すためにパソコンを使った在宅勤務の可能性を探る。

ながれ　**■主催者の趣旨説明**［5分］

■なぜ、今、パソコンなの？［15分］

A. やっと使えるようになってきた
　1.使いやすさ・機能の向上　2.価格の低下　3.インターネットの普及

B. 身近にパソコン好きがいた

■インターネット活用方法［20分］

A. 情報を得る　1.ホームページ…ホームページは「どこでもドア」
　2.メーリングリスト…HIV感染症治療の最新データも送られてくる

B. 情報を発信する　1.ホームページの仕組みと作り方…HTML解説等

C. コミュニケーション　1.ニュースグループ…興味のあるテーマについての議論に参加できる
　2.電子メール（E-MAIL）…切手も封筒もいらない電子郵便

D. PWA/Hからのメッセージ「私の社会参加を支援してくれるインターネット」

■インターネット・パソコン通信の利点と欠点［30分］

A. 利点　1.雑誌・本・新聞との比較…早い、地域を選ばない、形に残らない
　2.テレビ・ラジオとの比較…好きな時に利用可能、情報が蓄積される
　3.出版・広告との比較…安い、更新が簡単、対象は世界、品切れがない
　4.手紙・FAXとの比較…情報の再利用が容易、世界中から受け取れる

B.欠点　1.使える人が限られる　2.お金をもらいにくい　3.インフラが未整備

■パソコンを使ったPWA/Hへの技能修得事業［20分］

A. 概要解説　対象を絞った支援活動の一つ

B. パソコンの講習会　1.インターネットの利用…情報を得る・発信する、コミュニケーション
　2.創作…イラスト、デザイン、DTP、ムービー、マルチメディアタイトル等

C. お金を稼ぐ　1.ＬＡＰホームページ制作制作代行事業の解説
　2.在宅勤務の可能性を模索

■質疑応答［30分］

インターネットのセキュリティ問題について、インターネットをはじめるのにいくらぐらい必要なのか、在宅勤務の実施形態について、PWA/Hの期待度は？　等

感　想・PWA/Hはもちろん、その他のプライベートな悩みを抱えている人にもインターネットは必須となってくるのではないか。・自宅から社会参加が気楽にできるのは利点だ。

連絡先

ライフ・エイズ・プロジェクト（ＬＡＰ）

〒100-91　東京中央郵便局私書箱490号

TEL03-5685-9644　FAX03-5685-9703

E-mail:　GCD00301@niftyserve.or.jp

lap@tokyo.inetc.com

HOME PAGE:http://www.campusnet.or.jp/~lap/

郵便振替:00290-2-43826 LIFE AIDS PROJECT

インターネット上に登録されているＬＡＰホームページの画面

No．7	市民がＡＩＤＳを考える

主　催／ ＡＩＤＳネットワーク横浜
講　師／ 山下・萱原
協　力／ 高杉・竹内・新井

ねらい

社会の中で生活を営む人々がそれぞれの立場、社会、企業、地域、学校で学んできた正しい知識と態度を、家庭生活の中で示すことがＡＩＤＳを理解する上に非常に大切なことと思われる。

地域の中で、家庭の中で、友人同士で友好的に話しあうことができたら、ＡＩＤＳに対する偏見や差別をなくし、強いては日本全体をＡＩＤＳから守ることができる。

以上のことから市民がＡＩＤＳを考えるとき、今後ますます女性の役割が大きく期待される。　　参加者数：２８人

ながれ

前半　「ＡＩＤＳを正しく理解しよう」

1．ＨＩＶ感染とは　　2．ＨＩＶ感染とＡＩＤＳ発症の違い
3．ＨＩＶ抗体検査　　4．感染経路と予防
5．プライバシーの保護　6．ＨＩＶと治療の時期
7．その他

後半　クイズ２０問（理解度、常識クイズ）

方法　前半のレクチャーから各項目より２０問作り、ＹＥＳ，ＮＯを一斉に答えてもらう。（ＹＥＳ，ＮＯうちわ作成）

それぞれの答えに軽く説明をし、誤解されやすく間違いの多い問いには具体的に説明した。

おわり　聞きたいこと、質問したいコーナー。

感　想

初歩的な知識は持っていたので目新しさはなかったが、レクーチャー形式は参考になった。クイズにすると以外に初歩的なかんちがいがあって、周りを見渡して興味深かった。

今まで誤解していた点も改めて勉強し直すことができた。このような機会を得て正しい知識を得られたことは、今後私にとって役立つと思う。

主催者から

ＨＩＶ感染及びＡＩＤＳは単なる感染症として人にうつる病気だが人からうつされる心配の多い病気でもある事を、理解していただいたような手ごたえを参加者から受けた。

連絡先

ＡＩＤＳネットワーク横浜
〒231
横浜市中区伊勢佐木町2-66
満利屋ビル8階
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内
TEL 045-262-8811
FAX 045-262-8812

No. 8	H・I・Voice劇場

主　催／ H.I.Voice Act
協　力／ H.I.Voice 編集局

ねらい

ＡＩＤＳ患者やＨＩＶ感染者、その家族や友人のメッセージを声にだして読むことで、その思いを心と体に吸収し、ＡＩＤＳの理解を深めるという実験的な『朗読ワークショップ』を行いました。『Ｈ・Ｉ・Ｖｏｉｃｅ劇場』とは、このワークショップの成果を参加者有志で「朗読劇」として発表することです。観客は、肉声を通して耳から、そこにあるＰＷＡや家族の思いを、身体に取り入れ、また、発表者は発表することで、共感をより確かなものとしていきます。　　参加者数：３２人（発表者１０名／観客２２名）

ながれ

Ⅰ始めの言葉（10分）

…H.I.Voice 劇場についての説明

・私たちにとって、朗読することは、非日常ではなく、この「思い」を日常としている事の重さを知ること、そして、こんな「思い」をもちながら、同じような仲間の存在も知らずに心細い毎日を送っている一人でも多くの人達に、このメッセージが伝わることを願っています。等

Ⅱ劇場（読み手が役を決めて朗読）（50分）

…従来からのメンバー７名＋今回のワークショップ参加者の有志３名の計10名による朗読の発表。（朗読用の原文からの抜粋版を使用⇨発表参加者からは終了後回収）

・読み手は、観客を前に読むことで、原文を全身に取り入れてしまうちょっとしんどい経験をしますが、世代を超えた仲間と出会い、一つの時間を共有します。

・観客は肉声を通じて伝わるＰＷＡやその家族の思いを直接的に感じ取ります。

感　想

・別世界の人だと思っていた人の声が、実際に聞こえてきて、自分も同じ土の上に立っているのだと実感できます。舞台（川崎）と別の感動　（女性・25歳・公務員・練馬区）

・初めての方のVoice は緊張感が伝わってきたが、Act のメンバー、ほんの少し“慣れ”を感じた。読んでいる人は常に見られています。（男性・26歳・学生・湯河原町）

・H.I.Voice の読者です。昨年の報告を読んで興味を持って参加しました、AIDS講演会やカウンセリングセミナーに利用できると思った。（男性・42歳・薬剤師・宮崎県都城市）

・昨年の方が緊張感があった。Voice 手法を滋賀でも広めます。（女性・54歳・滋賀県）

連絡先

H.I.Voice Act

朗読ワークショップ(No.5)参照

H.I.Voice

〒198青梅市野上町2-7-4-106

定期講読希望者は住所・氏名を明記し通信欄に「△号からの送付希望」と書いて郵便振替口座「00190-2-612876」に申込み。

講読料：1800円（12号分・送料込）

Ｎｏ．９	生きる　-positive³-

主　催／　パトリック、岩室紳也

ねらい

ＨＩＶを体の中に持ちながら、positive（前向き）に生活しているパトリックの話を聞き、単にＨＩＶ／ＡＩＤＳの問題だけではなく、「生きる」ことについて考える。

参加者数：７２人

ながれ　オリエンテーション

パトと岩室は友人でもあり、患者と主治医という関係でもある。二人そろっての文化フォーラム参加が３回目。第１回はＨＩＶを体内に持つパトの話とコンドーム装着コンテスト。第２回はpositiveに生きていることの意味について。今回はpositive³と題してＨＩＶ／ＡＩＤＳに限定せず「生きる」こと全般についてパトと語る。

フリートーキング

①現在の治療について

ＡＺＴ→ｄｄＩ→ＡＺＴ＋ｄｄＩと薬の使い方を変えてきた。どんな薬を使うかは医者が決めるのではなく、二人で話し合って決めている。薬の副作用は強い。

②日常生活について

生活のリズムを自分にあったものにすることが大切。ニューヨークではサラリーマンをやっていた。しかし、自分が何をしなくてはいけないのかを考え、今は自分にあった仕事（クラブＤＪ、ＴＶＫ、週刊ＳＰＡ、等）を自分のためにしている。

③日本のマスコミについて

ＮＴＶではいまでも「エイズ感染」という言葉が使われている。Ｏ－１５７についても「・・かもしれない」というあいまいなことをメディアで流しているのはおかしい。

④死について

人間はいつ死ぬかわからない。今日死ぬかもしれないと意識しないと頑張って生きることができない。最後は自分で死に方を決めたい。

感　想

・パトをみて、本当に生き²しているなあと思った。

・気負わずに聞けて漫才みたいでよくみんなが笑っていた。

・なんとなく質問はしずらい雰囲気だった。でもＨＩＶポジティブのパトに聞きたいことはみんなあるとおもう。質問カードを作るといいかも。

・大切にするのは自分の意志や考え方が優先するということ、それだけでなく自分のことは自分で責任を持つ、この考え方はすべての人に共通するのではなかと思いました。

連絡先

Patrick

（クラブＤＪ、サウンドプロデューサー）

週刊ＳＰＡにカミングアウト大作戦連載中

TEL & FAX 03-3422-5246

（スケージュール管理：田中）

岩室紳也

エイズ-いま、何を、どう伝えるか-の頁参照

No. 10	”ＡＩＤＳ”を生きる人々の気持ち

主　催／ ＨＩＶと人権・情報センター

講　師／ 五島真理為（全国事務局事務局長）

ねらい

”ＡＩＤＳ”を生きる人々、すなわち感染者本人の気持ちや感染者にかかわる人々の気持ちを知ってもらい。理解してもらうことをねらいとした。　　参加者数：３６人

ながれ

1．五島による講演
- プライバシー（本人の心）は無視した告知
- カウンセリングの大切さ（告知前・後）
- 会社等による無断検査の実態
- 西欧との違い

2．ボランティアによる手記の朗読（講演をはさんで前半５本・後半６本）
ＰＷＡ／Ｈ本人、父親、母親、妻等の立場の方がそれぞれ寄せて下さった手記

感　想

- 人の気持ちの目で見えない部分を大切にしたい。
- 一人でいきているわけではないのでお互いに元気をわけあいたい。心でつき合うにもマナーがあるのではないかという言葉がとても感じるものがありました。
- 小学校５年生の手記は私にっとてはすごくつらかった。
- とても難しい問題だと思った。そしてその反面多くの人がこのプログラムに参加してくれたことは素晴らしいことだと思った。
- 感染者の妻の気持ちに共感するために朗読された手記はショックでした。私たちはどうしても感染者のみに関心を集中しがちですが、患者・感染者を取り囲む人もまた、特に親しい存在であればあるほど、非常に苦悩されていることを感じることができました。時には、お互いのＨＩＶに関する気持ちを言い表すことができなくて避けて通っていることが、重苦しい緊張感を生み出しているかもしれないのですね。講演にあったように、気持ちは反映であることをよく考えて、これから出会う一人一人と真剣に向き合って生きていきたいです。
- この講演のために書かれた「和解を終えて」という感染者の父親の手記はタイムリーなもので、今現在の原告の方の気持ちがよく理解できた。また、もう一つ、今回のために書かれた遺族の方の手記は、大切な人を喪った人の、死を越えて持続する思いが結晶となってほとばしり出た詩というべきものであった。同時に飾られたキルトを見ていると、手記の朗読とキルトが耳と目から私たちを包んで、遠い時空の世界へ招かれた思いがした。このために書いて下さった二人の方に感謝します。

連絡先

ＨＩＶと人権・情報センター東京事務局
〒101 東京都千代田区神田司町2-17-4風間ビル2Ｆ
TEL/FAX 03-5259-0622

No. 11	つ・く・る・性教育

主　催／ 横浜エイズ勉強会

ねらい

・いのちの大切さを伝える、自分を大切にするためのアプローチ

・アプローチの道具としての性教育グッズの紹介とカルタ作り

参加者数：３５人

ながれ

①性教育グッズの紹介：紙人形を使ったグッズ、ペニスの模型

②ネームゲーム：各グループに分かれて行う。

読みカード作り：参加者が性を語るためのキーワードを使って性教育カルタの読みカードを作る。→できた読みカードをグループ内で読み上げる。→各自好きなカードを選び、その理由や感想をグループ内で話し合う。

絵カード作り：各グループで出来上がった読みカードの中から各自気に入ったものを選び、絵カードを描く。

投　　票：すべてのグループの読みカードと絵カードを会場内に展示し、気に入った句と絵にシールで投票をする。

表　　彰：句と絵それぞれ１～３位までを表彰

句　１位「エッチな話、好きな人なら愛の話」

２位「コンドーム　つけなければ　ただのゴム」

３位「ふれあう中にも礼儀あり」

補　　足：フォーラム期間中、出来上がった性教育カルタはＡＩＤＳ文化フォーラム会場内に展示し、シール投票を継続した。

感　想

性教育と聞いて、どんなことがあるのかとても興味がありました。でも、実際には、そんな大それたものでなく、私たちが日常にふれているような内容を口に出して行う性教育でした。いつも頭にはあっても恥ずかしいという気持ちから、つい心の底にしまってしまったことに気付き、そのこと自体が性教育について自分から壁をつくっていたことがわかりました。もっとオープンに話し合うべきことだとも思いました。

実際にカルタ作りをしてみて、少し難しかったけれど、楽しめました。子供たちに伝えるのには、私たちの方がはずかしがってはいけないということがわかりました

連絡先

横浜エイズ勉強会

〒231 横浜市中区常盤町1-7

横浜ＹＭＣＡ

会員サービスセンター高村

TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ　第1･3土曜日 18:00～20:00

横浜中央ＹＭＣＡ（関内）

エッチな話、好きな人なら愛の話

No. 12	岩室をこえた？！［R指定］

主　催／ SAY　NETWORKっぽいかもしんない
協　力／ 岩室紳也

ねらい

ＳＴＤを予防するためには、性交渉を行う際にコンドームを使用することが有効といわれています。けれども、女性の中には「コンドームを付けてほしい」という気持ちを伝えられなかったり、付けてくれない相手とのＳＥＸを断ることのできない人がいるのも現実のようです。そこで、このような女性がパートナーにうまく伝えられれば、これからのＨＩＶ感染予防を推進することができるのではないかと考えこの講座を企画しました。

参加者数：５４人

ながれ

1　主旨説明

「エイズとセックスレポート」のアンケート調査の集計結果から、コンドームを使用していない男性のうち、89%がパートナーから頼まれればコンドーム使用すると思うと回答していることを紹介しました。

そして女性は、男性のコンドーム使用の機会の鍵を握っているともいえる事を伝えました。

2　劇

日常的な女性同士の会話の再現により、女性のＳＥＸに対する認識や、パートナーとＳＥＸに関する会話をすることに抵抗感を持っていることを、会場の参加者へ伝えました。

3　岩室式コンドーム装着法の確認

ペニスの模型を使用し、会場の参加者を交えて装着法を確認しました。

4　ディスカッション

どうすれば、女性がパートナーに「コンドームを付けてほしい」という気持ちをうまく伝えることができるのかを５グループにわかれてディスカッションしました。

グループ構成にあたっては、男性側の意見、女性側の意見をそれぞれ比較できるように、男性のみ、女性のみのグループに分けました。

参考資料　日本評論社「エイズとセックスレポート」　著者／宗像恒次、田島和雄

感　想　・わかりやすい内容の講座であった。

・普段、あまり他の人と話し合う機会の少ない内容について、ディスカッションができてとても興味深かった。

連絡先

SAY NETWORKっぽいかもしんない

〒231
横浜市中区不老町3-13-4-401
稲葉　敦子

Ｎｏ．13	電話によるＡＩＤＳ相談のデモンストレーション　ーロールプレイによるー

主　催／ 横浜いのちの電話　　講　師／ 有田モト子

ねらい

電話によるＡＩＤＳ相談の実際を体験してもらい、電話相談の大切さと同時に困難さも実感してもらう。　　参加者数：５０人

ながれ

①講師の指導により、グループに別れ、自己紹介、参加の動機等を語り合う（１５分）

電話による相談についての説明（２０分）

・相談者の悩みを受け止める

・説得、説教にならないようにする

・相談者の状況と悩みを感じているそのままを聴く

・相談者の話の流れを邪魔しないように受容的に聴く

②参加の動機

・実際に電話相談を受けている、または、そのトレーニングを受けたが不安なため

・いままでＡＩＤＳに関してかかわりは、無かったが、興味を持ったため

・電話相談という窓口でどういう責任を持って対応したらよいのか、また、しているのかを知りたくて

・クライエントの不安をどう受け止め、どう支えていくのかを知りたくて

③事例に基づくロールプレイ（２例２０分）

・相談員が掛け手になり、受け手を会場から募り、事例をもとにロールプレイを行う

④その後の話合い（６５分）

・不安を１回の相談で解消するのは難しいが、支えてくれる人がいる、一人ぼっちではないんだと感じることができると、相談者の気持ちも楽になるのではないか

・医学的な情報（例えば長期未発症者の事とか）も話しても良いのではないだろうか？最初の段階では難しいので、不安な気持ちをしっかりと受け止めることのほうが大切

・ＨＩＶ抗体検査陽性者に対して保健所での対応はどのようにしているのか？
抗体検査陽性者に対しては、必ず医師が検査結果を話することにしており、医療との関わりを重要視し、医療機関の紹介。今後の生活等細かなカウンセリングも可能

・相談者より一度しかかかってこない電話かも知れない。最低限伝えたいことは何か？
ＨＩＶ感染が不明な方へは、一人で悩まないで、保健所等で検査を受けてほしい旨を
また、ＨＩＶ抗体検査の結果が陽性の方へは、援助を受けられるボランティア団体や相談窓口、医療機関などの情報

感　想

・掛け手の顔、姿形が見えず、表情を読み取れないだけに、電話を受ける場合は、誠実な態度で、相談者の一言一言に耳を傾け、心を込めて聴くことの大切さを知った

・リフレイミング・ノーマライゼイションという視点の切り替えを学んだ

連絡先	横浜いのちの電話エイズ相談
横浜いのちの電話 〒240 横浜市保土ヶ谷郵便局私書箱32号	一人で悩まず電話を ０４５（３３５）７８３０

No. 14	PWA／Hと法的サポート

主　催／「エイズ予防法」を考える会　　講　師／ 中川重徳

ねらい　・エイズ予防方自体の問題点や法的サポートの内容を明確化する。
・患者・感染者の社会的立場の現状の説明及び問題点を報告する。

参加者数：５０人

ながれ

1．自己紹介（フロアの参加者も含め参加理由・疑問点・質問等の有無）

2．患者・感染者の現状報告及び問題点（せかんどかみんぐあうと島田氏より）

・PWA／Hの悩みは多種ある。・PWA／Hに対するマイナスイメージは強い。

・PWA／H自身が不安・否定的・自己受容ができない、他人に話せない、相談できない、問題点が出てこない。→自己否定しているためにひどい対応を受けても諦めてしまう。→診療拒否、守秘義務拒否、本人の意思が尊重されない。→解雇又は解雇に対する不安から健康保険を使わない。

・PWA／Hの経済的危機：負担の少ない仕事を求める。→不安定・低賃金

・PWA／Hは情報を得にくく、また、本人の望む選択が出来にくい。

以上のような点から法的サポートが求められている。

3．あるケースから：定期的に通院するため常勤の仕事からアルバイトに。医療費の為サラ金で借金。その後、生活保護を受けるようになるが、サラ金への借金はなくならない。自己破産→裁判所に診断書を提出。→サラ金業者が閲覧出来るので、診断書にエイズとは記載出来ない。→試行錯誤しながら進めている。

4．エイズ予防法について

・平成元年に成立。補則も入れて２０条足らず。

・法律の成立背景：１９８７年3月国会提出。８６年１０月松本事件：フィリピンからの出稼ぎ者が帰国して陽性と判明。神戸事件：実名顔写真報道。→エイズパニック：エイズは怖い病気、人に知られたら大変というイメージを作った。本当はここで「太陽方式」の法律が必要だったが、出てきたのは「北風方式」。北風方式：隔離。太陽方式：十分にサポートして感染を防ぐ。性行為感染症は北風方式では医者に行かなくなる。英国は太陽方式で梅毒の有病率低下。

・問題点：医師が患者の情報を行政に提供する。→：①医師と患者の信頼関係は？②医者に専門外のことを課しているのでは？

・サポートの第一：まず、この法律をなくすこと。

感　想・予防法について知りたいという人、行政関係の人、エイズのボランティア団体の参加者が多かった。福岡県や大阪府からの参加もあり、このフォーラムの重さを感じました。・予防法について知りたいという人がたくさんいた。一つの法律がこんなに注目されるのはめずらしいのではないか。・弁護士の方が、ひとつひとつ丁寧に説明してくれた。私はこの法律を詳しく知らなかったので、とてもためになりました。

連絡先　エイズ予防法」を考える会
〒180　武蔵野市西久保1-1-9 ティーズロフトビル 4F
武蔵野法律事務所　中川重徳　　TEL 0422-55-2211　FAX 0422-55-7750

Ｎｏ．15	薬害エイズにみる市民運動

主　催／ ＨＩＶ訴訟を支える会横浜
ゲスト／ 高橋真紀・溝田大・米田智彦

ねらい

若者たちの企画で１９９５年７月に行なわれた『あやまってよ’９５　人間のくさり』には約３，５００人の人々が厚生省抗議に集まった。その後も１０月にはラップで渋谷をパレードする『厚生省を更正しよう』、１２月には署名をクリスマスプレゼントに見立てて提出する『サンタも怒るよ　こりゃアンタ』など、従来にはない運動が展開された。このセッションでは、これらの企画の中心にかかわった人から意見を聞き、なぜ自分たちが運動にかかわったのか？なぜ３，５００人もの人が集まったのか？そして、こうした運動の意義と問題点を明らかにしようとした。様々な運動の参考にしてもらうことが目的である。

参加者数：６３人

ながれ

○ビデオ上映（３０分）１９９１年『とびらをひらく』集会から１９９５年『サンタも怒るよ　こりゃアンタ』まで、集会や抗議行動など東京を中心にした歴史をダイジェストにして紹介。

○パネルディスカッション（６０分）薬害エイズを初めて知ったのはいつか？運動にかかわるようになったきっかけは？川田龍平のカミングアウトをどう感じたか？何にこだわって運動を企画していったか？どうして３，５００人もの人が集まったと思うか？どのような点に苦労したか？どうあるべきであったと思うか？などについて、司会者からパネラーに次々質問していった。

○質疑応答（３０分）・運動をする前と後で自分たちの感覚がどう変わったか？・原告に負担をかけ病状を悪化させる運動では本末転倒ではないか？など

感　想

・何かしてあげなきゃと勝手に思い込んで自分を捨てて活動してしまうことが多々ある。そうではなく薬害エイズ以外の自分も持っているというのが印象的。
・運動をやっている人たちの熱意に感動した。
・若者が世論を動かすのはすごいと思った。

連絡先

ＨＩＶ訴訟を支える会横浜
〒231
横浜市中区伊勢佐木町2-66
伊勢佐木満利屋ビル8F
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内
郵便振替口座：
00200-1-22「支える会横浜」

Ｎｏ．16．19	TAKAYOSHI 青春の旅

主　催／ ＨＩＶと人権・情報センター

ねらい

Takayoshi 君の絵を見て、絵と対話することで彼の無念さ、生そして死に対する思いを感じとってほしい。

参加者数：５０人＋３０人

ながれ

☆１９歳でＡＩＤＳのためになくなった絵が好きで画家になることを夢見た岩崎孝祥君の作品展（ １０点）

（ Ｘ　ＪａｐａｎがＴａｋａｙｏｓｈｉ君に贈った曲"Tears" を流しながら）

☆Ｔａｋａｙｏｓｈｉ君へのキルトの展示

☆お母さんである岩崎和美さんを囲んでの座談会

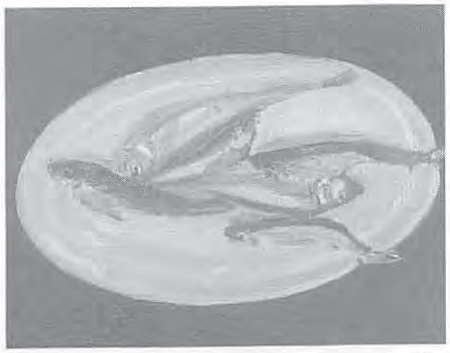
感　想

・最後に描いた桜の絵をそれ以外の絵を見るとなくなる５日前の状況が想像できない。まさにお母様の「壮絶」ということなのだろう。「生きる」力を感じる絵です。このように生前の自分を残せずに死んでいく人やひとりで死んでいく人も沢山いるだろう。

・今を大切にしよう。身近に色々な人とフランクにＡＩＤＳ／ＨＩＶについて話せて近しく感じる。

友　へ

ジャケットのなかの少女



魚

連絡先

ＨＩＶと人権・情報センター東京事務局

〒101　東京都千代田区神田司町2-17-4風間ビル2F　TEL/FAX 03-5259-0622

No. 17	テディベアワークショップ

主　催／ メモリアル・キルト・ジャパン　　講　師／ 寺口、上林、岡部

ねらい

・テディベアをつくりながら、ＭＱＪの活動の一つである「テディベア基金」の内容を理解してもらい、テディベアづくりへの協力を呼びかける。

・布を使っての作業（これもキルティングビーといえる）の中で、人と話しやすい雰囲気が生まれることを体験してもらう。

・ＨＩＶ感染症／ＡＩＤＳについて身近に話せる場をつくる。

・無理せず仲間たちと集まって身近にできるボランティアのあり方を提示する。

参加者数：２６人

ながれ

１）ＭＱＪの活動紹介

２）なぜテディベアを作るのか、テディベア基金の目的について説明

３）テディベアの作り方説明

・６、７名ずつ３つのグループに分かれて作り始める。

・各グループのリーダー（スタッフ）は作り方について適宜アドバイス。

・１）、２）について個別に説明していく。

・慣れずにうまくいかない人やペースが遅い人に、あせらずできるよう心を配る。

・キルティングビーの楽しさを強調する。

・今後も続けていけるよう声かけする。

４）できあがったテディベアや作成途中のものを披露しながら、今日の感想を述べあってもらう予定だったが、作ることに精一杯という感じでそれまではできなかった。

５）時間切れの方には事務局へ場所を移して継続した。（最後まで仕上げた男性もいた）

感　想

・横浜でＭＱＪボランティアが少しづつ根付いており、テディベア作りで輪が広がってきていると思った。

・'94の国際エイズ会議の時に行ったインターナショナルディスプレイや、昨年横浜市の催しで行ったディスプレイのボランティアなど懐かしい顔ぶれにも出会えた。メモリアルキルトの説明を初めて聞く人もあったりで、それぞれにあった説明が必要だった。

・上記のボランティア以後の活動などを交換しあえた。

・もっと、話し合える余裕があればよかった。

・自宅でも作れるので、このことで協力できるなら続けてみたい。

連絡先

メモリアル・キルト・ジャパン

〒532

大阪市淀川区西宮原1-6-60プラザ新大阪216

TEL 06-350-9286　FAX 06-350-9287

Ｎｏ．18	薬害エイズって何が問題なの？

主　催／ 薬害エイズを追及する市民ネットワーク
講　師／ 草田央
協　力／ HIV訴訟を支える会横浜

ねらい

薬害エイズに関する報道（情報）が氾濫する今、いったい何が問題なのかわからなくなってきている。そこで、情報を整理することで見えてくる問題点を解説し、今後の報道を理解するうえで役立つ枠組みを示すことを試みた。また、薬害エイズから見えてくる薬害構造を考えてもらうきっかけとなることを期待した。

参加者数：６３人

ながれ

○１９９６年（３０分）
資料公開の経緯から和解の到達点までを解説

○１９８０年代（３０分）
厚生省がエイズ対策として何を一所懸命行なってきたかを、公開された資料や判明した事実から読み解く

○１９７０年代（３０分）
非加熱血液凝固因子製剤が認可され、販売が拡大されていく製薬企業の論理を解説し、薬害発生の本質に迫る

○質疑応答（３０分）
・エイズ研究班について
・第４ルートについて
・行政システムをどのように作り替えたらよいのか？
・医者との信頼関係をどう作るか？

感　想

・厚生行政の問題点を明確にしていると思った。
・国からの発表を一方的に鵜呑みにしないで、目を開き、多方面から考えてみなければ知らず知らずにコントロールされてしまうのだと思い知らされました。
・今までの出来事を深く考慮していくことで、本質的な問題はあまり解決されていないことがわかる。
・公表されない現実について、他では得られにくいことが聞けた。

連絡先

薬害エイズを追及する市民ネットワーク
FAX 03-3397-7708
E-mail：aids@t3.rim.or.jp
郵便振替口座：
00100-9-659685
「クマの手クラブ」

No. 20	性風俗とＨＩＶ／ＡＩＤＳ

主　催／　Ｃａｍｐｕｓ　ＡＩＤＳ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ
講　師／ 山口みずか（コマーシャルセックスワーカー．フリーライター）
協　力／ 岩室紳也：神奈川県秦野保健所医師

ねらい

ＡＩＤＳ電話相談で「僕、先日ピンサロ行ったんですけどＡＩＤＳじゃあないでしょうか。最近体の調子も悪いし、、、。」なんてよくある話です。はたして性風俗店でどのようなことが行われ、またＨＩＶ感染の成立はありえるのでしょうか。単に性風俗と言っても様々なサービス種類があります。ピンサロ、ソープ、ファッションヘルスなど。現役性風俗嬢山口さんと性風俗童貞渡部君が実体験を交え楽しく講義。また医学方面から岩室医師がＨＩＶ／ＡＩＤＳを含めたＳＴＤをレクチャー。電話相談員で性風俗がよくわからない人への情報提供。

参加者数：６０人

ながれ

1．（趣旨説明、お断り）性風俗を奨励するものではありません。また、女性の性を商品にすることの是非を議論する場でもありません（５分）
2．講師の自己紹介とＣａｍｐｕｓ　ＡＩＤＳ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅの団体紹介（１０分）
3．性風俗のサービス区分と具体的デモンストレーション（４０分）
4．プレゼントクイズ（５分）
5．性風俗とＨＩＶ／ＡＩＤＳを含めたＳＴＤ講義（３０分）

感　想

性風俗業界内の危険が現実味のある話となった。
聴講者のなかには保健所の人やＡＩＤＳ電話相談の人もいてさかんに質問があった。
会場の人を性風俗になじませる時間が長すぎた。

連絡先

〒193
東京都八王子市台町3-18-15
渡部享宏
TEL 030-962-0221
E-mail:bym02334 @niftyserve.or.jp

Ｎｏ．21	訪問（在宅）サービス・・・・みんなが参加するために

主　催／ＡＩＤＳケア・プロジェクト

ねらい

訪問（在宅）サービスのいろいろな事について、一つの事例をもとに、私達が考えながら、学びながら、行った事についての、話をさせていただき、感染者の増加に伴い、これから身近いになる訪問（在宅）サービスについて、一緒に考えるきっかけになり、さまざまな問題につきまして、いろいろと話し合うこと。　　参加者数：３２人

ながれ

感染者の増加に伴い、訪問（在宅）サービスの意義とか目的とかいう部分の話では、一般的にもなかなか分かりにくい面もあります。プライバシーに留意し、失礼のない範囲での実話をさせていただきまして、これからの訪問（在宅）サービスを考えたり、自分が誰かのサービスを行う説き、今日の話を思い出し、参考にしていただければ幸いです。

在宅のことは、考えれば考える程難しい事が沢山あるのですが最初からむずかしく考えますと、行動が伴って行きません。もし、そういう訪問（在宅）の機会が、今後ありましたら、むずかしく考えないで”当たって砕けろ”的な姿勢で個人的であれ、何であれ、積極的に参加をしていただきたいと考えます。私達、伴奏者のスタッフは毎週水曜日に「サロン」を通して、感染者の方とよく顔を合わせております。その中で話し合う事は・・・

◎エイズを理解するための情報交換や勉強

◎各々の病院や治療のこと、そしてそれらの情報の交換

◎新薬の話や、新しいエイズのニュースの交換

◎仕事こと、家族のこと、恋人のこと、ＳＥＸのこと、宗教のことなど、各々の価値観のもとに、死生観なども広く、いろいろな話をしています。どちらかが一方的に何かを与える、という関係では無く、共通の時間を多く持ち、互いに対等な『友人関係』を築いております。広い意味で言えば「伴走者システム」の最終、最大の目的が、訪問（在宅）サービスである、と言う訳ではないのですが、現状で訪問サービスを考えたみた場合に、今『サロン』に顔を出している方々が、在宅の必要が生じた時には、気軽に声をかけてくれたらと思っています。なぜ、それらの方々が・・・と言いますと、訪問（在宅）サービスを始める時、一番難しいのが、その人と互いに、どうコミュニケーションを取るか、とって行くかだからです。『サロン』以外でも私達は、食事会や誕生会、旅行、そして『日曜サービス』のメインメニューもあります。『マーッサージセラピー』などを通して、共通の時間を多く持ち、顔見知りになっています。自然とお互いのことが分かっています。つまり普段の付き合いの「延長線上」に在宅がある・・と言うのを、私達スタッフは理想と思っております。

ただ、現実としては、そういう関係を作れる人ばかりから、依頼が来る訳ではありません。私達に取っても、現状での問題点がここにあると感じております。実際に、私達が最初に在宅を引き受けた方というのは、今までに一度も会ったことのない、勿論『サロン』にも顔を出したことのない方でした。

連絡先

ＡＩＤＳケアプロジェクト

〒156　東京都世田谷区赤堤2-44-3-101　TEL/FAX 03-3378-9095

No. 22	プライマリケアとＡＩＤＳ

主　催／ ＨＩＶと人権・情報センター　東京　医療部会　　司　会／ 吉永　陽子

ねらい

同フォーラムの第１回めから継続して行っている企画。ＨＩＶと人権・情報センター東京医療部会では、ＰＷＡ／Ｈ支援の一貫として医療機関の拡大を目的に活動している。ＰＷＡ／Ｈの医療ニーズに答えるためには、ＨＩＶ診療が拠点病院のみに限定されることなくプライマリケア（地域医療）の参画が必須である。そのためには、より多くの人々に「ＡＩＤＳは長期慢性疾患のひとつ」という認識をひろめる必要がある。参加者：４９名

ながれ

①司会者がスライドを使用して拠点病院構想におけるＨＩＶ診療の現実について説明。ＨＩＶ診療を抗体検査から告知まで、発病まで、ターミナルケアの３段階に分類しそれぞれＰＷＡ／Ｈのニーズと現実を比較した。（第一段階：すべての抗体検査にプレテストカウンセリングがともなう事、受診先が確保されるだけでなくその選択が可能であり拒否も可能である事。第２段階：長期慢性疾患としてＰＷＡ／Ｈがライフスタイルを変化させることなく診療の継続が可能であり自ら健康管理を行えるような環境が整う事。比較的早期の合併症の検索が可能である事。第３段階：尊厳ある個人として病院のみでなく地域においても看取られるという選択が可能である事等）

②７、８人のグループに別れてグランドルールを司会者が提案した後でＰＷＡ／Ｈの医療ニーズと現実とのギャップを埋めるための解決策について討論をした。司会者の提案により、討論テーマをＰＷＡ／Ｈが現実的に利用可能な社会的資源について列挙すること、プライマリケアをキーワードにそれらのネットワークについての２段階に分けた。それぞれのグループの討論内容をフィードバックしあった。

③司会者がスライドを使用して米における訪問看護の様子を紹介するとともに、カナダの国際会議での新しい薬物治療の可能性についての報告をしプライマリケアとＡＩＤＳの問題があらたなる展開を必要としていることを提示した。

感　想　・どうして医療拒否が存在するのか理解できた。・ニーズに答えるためには医療だけでなく行政、教育からの対応も必要だ。・あっと言う間に時間がすぎた。もっと時間があってもよかった。行政、医療、教育、様々な分野の人が参加して面白かった。また女性のパワーがもっと役立ってもらえたらと思った。・プライマリケアのみを考えても問題は山積みである。保健所もそれなりに対応しているがうまく機能していない。グループ討論の時間をかなりとっていたにも関わらず時間が短くもっと話し合いたかった。なかなか興味深く、しらないことも多かった。・エイズは予防教育だけではない。

連絡先

ＨＩＶと人権・情報センター（ＪＨＣ）
東京　医療部会
〒101
東京都千代田区神田司町2-17-4
風間ビル2階
TEL/FAX 03-5259-0622

活動概要

・ＰＷＡ／Ｈへの医療情報の提供、相談
・医療機関の開拓
・学会への参加、発表
・知識の普及活動
・ＨＩＶと人権・情報センターの活動(電話相談、自助グループ、ケアサポート、機関誌の発行に対する支援)

No. 23	Safer SEX Workshop for Gay Men

主　催／ ぷれいす東京　Gay Friends for AIDS

ファシリテーター／ 河野通子・砂川秀樹

ねらい

このワークショップは。「セイファー・セックスに関してすでに知識はあるし、したいという気持ちもあるのだが、なかなか実行できない」という思いを抱いているゲイを対象として開くために、「ぷれいす東京 Gay Friends for AIDS 」が独自にデザインしたものである。セイファーセックスを妨げている要因を整理・分析することで、自らが目標とするセイファーセックスへと行動をうつすための具体的な方法についての考え、その方法を実際に活用するためのスキルを習得することを主な目的している。また、「セイファーセックスをしようと思いながらも、できない」という葛藤を抱えるものが集うことでお互いを力づける機会の提供にもなるのではないかというねらいもある。

参加者数：１９人

ながれ

参加者の気持ちをほぐすため、体を軽く動かした後、２人づつ組みになり自己紹介をした後、皆に向かって互いを紹介。その後、このワークショップの流れやルールについて説明した後、ワークショップの内容に入る。

ワークショップの流れは次の通りである。

①セイファーセックスができにくい状況、状態、原因等を思いつく限り出してもらう（大きな付箋に書いてもらい、前へ貼りだしていく）。

②出してもらった文章や言葉を皆で検討しながら、曖昧なものをクリアーに、抽象的名者を具体的にしていく。いくつかの要因に分かれるものは、読み砕いていく。

③出ているカードで、関係のありそうなものをグループ化していく。いくつかに関係のありそうなものは、その数のカードを作る。

④問題が、いくつかの場面や相手との関係性などを基準にしていくつかのグループに分けられることを確認。

⑤それぞれのグループ分けした問題をテーマとした、「セイファーセックスができない物語」を２グループに分かれて作ってもらい、それぞれ発表する。

⑥その物語をお互いのグループで交換し、どの場面でどのようにすれば、その物語の中でセイファーセックスができる可能性があるか考え、「セイファーセックスができる物語」に書き変えてもらい、発表する。

⑦最後に参加者が輪になり、感想をのべる。

感　想

・「セイファーセックスと言うと、義務感や押しつけなどマイナス・イメージがあったのだが、こうやってシナリオやフォーマットを作ることでポジティブな可能性が考えられた。」

連絡先

ぷれいす東京

〒161 東京都新宿区下落合1-3-6-201

TEL 03-3361-8964　FAX 03-3361-8835

Ｎｏ．24	生きる　　マザーテレサ・その活動

主　催／ グループＰＡＺ
講　師／ 中嶋儀一
協　力／ カトリック横浜教区福祉委員会、地球家族の会

ねらい

・マザーテレサ（1979年ノーベル平和賞受賞）のその活動を通して人間が人間として生きる意義と共生をさぐる。エイズとの関わりを強調せず、どんな病も障害もすべて含めて－貧しい人の中の最も貧しい人に仕える－というマザーテレサの活動を一人でも多くの人が理解し、それぞれの立場で活かしていくきっかけとなることを願う。

・1984年から７年間、インドのカルカッタのマザーテレサの元（死を待つ人のホーム）で奉仕活動をされていた中嶋儀一さんのお話を伺う。現在、東京の山谷でホームレスの人々の相談員をされている中で「生きること」「貧しさ」ということを問う。

参加者数：５５人

ながれ

・グループＰＡＺの趣旨説明
・ドキュメンタリー映画「マザーテレサとその世界」（監督：千葉茂樹）のビデオ（55分）
・中嶋儀一さんの講演（40分）
・質問および意見交換（20分）　参加者はアンケートを記入、個々に質問をした。

感　想

・マザーテレサは《今日、日本や他の裕福な国々では、とてもひどい飢えがあるかも知れません。誰からも必要とされていないというひどい恐れ、誰からも愛されていないというひどい貧しさ、この貧しさこそ、一切れのパンへの飢えよりも、もっとひどい貧しさだと思います》と言っている。講師の中嶋儀一さんも「愛は痛みを伴うもの、苦しいものです」と話された。

・５０名を越す方々の参加をえることができ、また今回のテーマに興味を持って東京や小田原からも足を運んで下さった方がいてうれしく、また感謝であった。

参加者のアンケート（２８名）にみる限り、

・「とても大きい、広い視野でとらえていたということがわかった」（20代女性）
・「ベースに流れていることはHIV・AIDSに関しても、ホームレスの問題にしても、問題点はどこか似ているんだナアと思った」（30代女性）
・「大きく、「共に生きる」ことを考える良い機会」（50代女性）と参加者の同感を得られたようでほっとした。今後とも人が人として生きる姿勢を問うてゆきたい。

連絡先

グループＰＡＺ
〒231
横浜市中区山下町２２５
横浜ＹＷＣＡ内
TEL 045-681-2903
責任者　大高　ゆみ子

Ｎｏ．25	従業員の医療情報は誰が管理すべきか？

主　催／ ＨＩＶ不当解雇訴訟支援団
講　師／ 伊藤章・武藤達也・渡邉彰悟
協　力／ 中島俊介

ねらい

「ＨＩＶ感染者不当解雇訴訟」の争点は、ＨＩＶ感染者の解雇の是非ではなく、ＨＩＶ抗体陽性という医療情報の扱いについてだった。エイズがまだ身近な問題として感じられない今、個人の医療情報が会社に把握され不当な扱いを受けるという問題に普遍化して、より良い雇用環境について考えてもらうことを目的とした。

参加者数：３９人

ながれ

○事件の概要説明（１０分）
　ＨＩＶ感染者不当解雇訴訟事件において、ＨＩＶ抗体陽性という医療情報がどのように流されたのか？を説明し、裁判の争点を説明。

○経営者の健康配慮義務（２５分）
　経営者の健康配慮義務に関してのパネルディスカッション

○従業員のプライバシー権（２５分）
　従業員のプライバシー権に関してのパネルディスカッション

○健康配慮義務とプライバシー権（２５分）
　健康配慮義務とプライバシー権とのかかわりについてパネルディスカッション

○質疑応答（３５分）
　・医療情報は誰が管理すべきか？
　・労災が起きた場合・職場環境とのかかわり

感　想

・職場での医療情報管理は、人権意識の高い企業ではプライバシーに配慮したりするが、現実、中小企業等ファミリー意識が強いところでは難しいと思いました。
・企業、医師、弁護士の人という３人の人の組み合わせはおもしろい。
・レジュメがよくまとめられていて、わかりやすかった。

連絡先

ＨＩＶ不当解雇訴訟支援団
〒231
横浜市中区伊勢佐木町２－６６
伊勢佐木満利屋ビル８階
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内

郵便振替口座：
00250-8-59898 「不当解雇訴訟支援団」

Ｎｏ．26	PWH/A を支える医療機関とNGO

主　催／ AIDS & Society 研究会議　　講　師／ 樽井正義　野田和子

ねらい

AIDS & Society 研究会議のHAIN（HIV/AIDS Information Network）プロジェクトは、1996年3月にストップ・エイズ基金の配分を受けて、「NGO情報ネットワーク1996」と「医療情報ネットワーク1996」を作成した。これらの冊子はPWH/A、NGO、行政、医療機関に必要な情報を提供することを目的としている。そこに収載されたデータを整理・分析し、私たちの社会におけるASO(AIDS Service Organization）とエイズ拠点病院の現状と取り組むべき課題を検討した。

参加者数：５８人

ながれ

１．ＮＧＯ

アンケート調査に応えた83団体には、以前から別の活動を行っていたものもあるが、その多くは87年のエイズ・パニックを契機に作られた。設立のピークは横浜会議前年の83年で、会議が私たちの社会に与えたインパクトがうかがえるが、会議後新しい団体が作られている。その多様な活動は、(a）講演会やパンフレットによる啓発、(b）電話相談、(c）ケア・サポートの提供、の3 つに大別される。　活動の現状分析から次の課題が明らかになる。(1）活動が首都圏と京阪に集中しており、活動が見られない県が半数の24も残されている。(2）PWH/A の4 分の1 を占める外国人へのサーヴィスが不足しており、とくにアジア人に対して、国際交流を行っているNGO との連携などの方途を探る必要がある。(3）PWH/A は各NGO のなかで重要な役割を果たしているが、PWH/A 独自の団体は未だに存在しない。ケア・サポートを提供している41団体の半数の19団体にPWH/Aのセルフ・ヘルプ・グループがあり、また病院単位の交流の場も作られているので、それらを緩やかにつなぐネットワークの形成が望まれる。

２．拠点病院

1996年3月までに全都道府県にわたり188の拠点病院が選定され、15都県75医療機関の名前が公表された。選定・公表はまだ途上にあり、調査の過程でも、医療機関がそれに向けて努力していることがうかがわれた。

54医療機関から寄せられた回答をカウンセリングを中心に分析すると、(1)拠点病院の6割にMSWが、3割に心理職がいるが、その3分の1強しか日常のカウンセリングに活用されていない、(2)抗体検査の結果告知時のカウンセリングは9割の医療機関で行われているが、検査前には7割でしか行われていない、という問題点が明らかになった。エイズだけでなく心理的ストレスが避けられない慢性疾患にとって、カウンセリングの重要性がもっと認識される必要がある。また、NGOの存在を知っていると答えた拠点病院は半分強にとどまっておりNGOの活動の地域格差と併せて反省すべき点と思われる。なお、8月8日現在、293の拠点病院が選定され、1県3医療機関を除き、すべて公表されている。

連絡先

AIDS & Society 研究会議
〒162 新宿区馬場下町60 マンション早稲田401
TEL/FAX 03-3200-0399

Ｎｏ．27	同性愛者の人権とＡＩＤＳ

主　催／ レズビアン・ゲイ・ネットワーク　　講　師／ 南定四郎、中山普作、平井和也

ねらい

エイズ差別は同性愛差別と切り放しては考えられないことである。一般の人々が同性愛について差別を抱くのは、何か異星人のような存在として同性愛者を見るからではないか？という問題意識から、ナマ身の同性愛者が自らを語ることを通して同性愛者差別の問題提起を行い、そこからエイズ差別を明らかにしたいということであった。

参加者数：４０人

ながれ　（１）講師がそれぞれの体験にもとづいて同性愛を語る。

① 南　：自分が同性愛者であるという事に気づいたのは雑誌に発表されていた記事に同性愛者のことがあり、自分と同じ体験なので「私は同性愛者なのだ」と思った。このように、同性愛者は自分を同性愛者だと認識することさえ困難である。何となく他人とは違う、そして違うことは悪い事だと思ってしまう。

②中山：日本ではエイズ患者第１号が発表されたとき、彼は同性愛者だということで「エイズは同性者の病気だ」と言われた。このように社会的な批判を受けて、エイズ差別が拡大した。

③平井：マスコミ等では同性愛者が公になっていない頃、「自分は変だ」同性愛は悪いこと、不幸だと思った。

（２）会場からの質問と意見。

①同性愛者の人権について語る事よりも、エイズの正確なデータを提供して「ゲイよりも、それ以外の人が感染している数が多い」と言う事実を公にしたら差別はなくなるのではないか？

②どうして同性を愛するのか？

答：「異性を愛するのに、どうしてか？と質問したら答えられないであろう。同じように、同性を愛する事に理由はない。」

③ＨＩＶ訴訟を支える会の会員より：薬害の人にとってみれば同性愛の人々と一緒にされたくないという考えがある。

感　想（主催者）

このセクションの位置付けは「同性愛者差別」の起きる根源に関わる人々の意識について明らかにすることであったが、話が利害関係の自己主張に終わってしまった。次回は参加者が同性愛について客観的に何かをつかめるように準備をして、実りのあるディスカッションにしたいと思う。

連絡先

レズビアン・ゲイ・ネットワーク

〒162 新宿区市ヶ谷薬王寺70
ブラザー若松301 LGN

Ｎｏ．28	性産業と外国人女性

主　催／ 横浜ＹＷＣＡ・京都ＹＷＣＡ　Asian People Together（アプト）
講　師／ 青木理恵子（京都ＹＷＣＡ幹事）

ねらい

外国人女性がとり込まれる人身売買のワナと現実。この状況に日本の民衆、法律がどの様に対応しているのか？　　参加者数：５５人

ながれ

①主催者の趣旨説明　（１０分）

②京都ＹＷＣＡアプトとは：　滞日外国人のための電話相談サービスを中心に外国人への援助を提供している。個別の相談に応じ、問題解決への援助をすると共に問題を引き起こす原因、特に人身売買の状況と日本の法律について調査活動も行っている。

③外国人女性が取り込まれる人身売買のワナ：　ここ数年外国人が加害者となって殺人をおこす事件が起きている。この中で市原事件を取り上げて（その他下館・桑名・新小岩事件と経緯がよく似たものがある。）加害者となった女性たちはどうやって日本にきたのか？組織的なシンジケートの存在（タイでは１９８５年位にできたと推測）によって複数のブローカーが関与している実態。また日本では暴力団の関与が説明された。ブローカーは彼女たちが逃げないようにするため、パスポートの取り上げ・部屋に監禁・外との連絡の遮断・『逃げたら親を殺すぞ！』という脅しなどによって何重ものワナでしばっていく。

④ワナに取り込まれた人を誰がどう守る？日本の行政機関では人身売買と特に関係の深いのが労働基準監督署・警察・出入国管理局の３つ。労基法では強制労働の禁止、前借金相殺の禁止、中間搾取の禁止などがあるが外国人が労働法違反を訴えて自分から労基署に出向く事はない。理由：労基署の存在を知らない、日本の滞在資格が切れている人は労基署に行くと通報される事を恐れている。警察では社会風紀を乱す行為に取り締まるが、売春の実態を知りながらも通常は摘発、逮捕には至らない。警察の意識では『売春は被害者のない犯罪』と考え麻薬でも絡まない限り逮捕しない。入管は法務省の管轄で日本に滞在する事が好ましくない外国人と判断すると即刻国外退去とする。入管が定義する『好ましくない人』とは刑罰法令違反者で逮捕された人も『好ましくない人』に該当とする。被害者の人権確保は配慮の中になく権利を回復する事もない。また、それぞれの範囲が決まっており、そこの仕事をこなしているだけで人間１人をトータルに見る部署はどこにもない。

感　想

力の問題＝金によってできた幾重もの格差（国の優位、男と女）が強制売春の実態ではないか。途上国での売春は経済援助の一言は傲慢さを物語っているとしか感じない。

連絡先

横浜ＹＷＣＡ
〒231横浜市中区山下町225番地
TEL 045-681-2903 045-662-0926

京都ＹＷＣＡ（アプト）
〒602京都市上京区室町通出水上ル
TEL 075-431-0351 075-431-0352
TEL 075-451-6522（アプト電話相談）

Ｎｏ．29	地域におけるケアを考える‥‥「ネスト」について‥‥

主催／ ぷれいす東京　　**講師／** 池上千寿子 柳沢ゆみ子 斉藤祐治 森本みずほ 生島嗣

ねらい　孤立しがちなＨＩＶ感染者・ＡＩＤＳ患者のために情報交換・交流の場ネストを運営しています。私たちが管理・運営しているネストではどのようなサービスを提供しているのかを、ネストを利用している方の意見もふまえて皆さんに知っていただき、このような場が、一箇所でも多く開設されることを期待します。　　参加者数：５０人

ながれ　（ぷれいす東京とは）ぷれいす東京は地域に根ざした活動を通じて、ＨＩＶ／ＡＩＤＳという一つの病気による問題を抱えている人達が、ありのまま（自分らしく）生きられる環境（コミュニティ）を作り出すことを目指して活動しています。

（ネストとは）ＨＩＶ感染者・ＡＩＤＳ患者とそのパートナーおよび家族が利用できる情報交換・交流の場です。（住所電話番号は公表していません）

○オープン日時　・(月)～(金)10:30~15:00　・第2、第4(木)女性の日　・要望により(土)(日)もオープンする　・第1(木)会議のためクローズ

○サービス内容　・医療や生活に関するものなど、様々な団体のニューズレターや印刷物などを利用者が自由に閲覧できる。・月に１～２回プログラムを開催（開催したおもなプログラム）・マッサージ講習と体験／講師バキーノ林子さん。・ＮＹセントルーカス病院稲田頼太郎さんを招いて。・毎週(月)(火)昼食提供・遠方より通院する方および入院患者を看護する家族のための宿泊サービス(宿泊のみ一泊2000円その他の利用は無料)

○スタッフはネストを利用する方々のプライバシー厳守を一番に考え、昼食メニューに工夫をこらしたりプログラム内容を吟味する等よりよいサービスの提供を目指しています。

○ネスト運営資金全体の４分の３は補助金にてまかない、残りの４分の１は寄付やスタッフが製作するネストグッズを販売して資金調達しています。

○毎年ネストの利用者は増加しています。利用者もただサービスを受けるばかりではなく積極的に自分の生き方を見つけ活動しています。「利用者の自立とＱＯＬ向上の支援の場としてのネスト」がこれからの課題です。そしてより多くの地域でのこのような場の必要性を強く感じています。ネストを利用している方々も、ネストのような場があってよかったと言ってくださっています。皆さんいろいろな立場の方同士さまざまな話をしたり情報交換等をしています。その中で仲間同士でできるサポートが育っていくこともあり、全国にネストのような場がもっとできると孤立する人がいなくなると思います。

感　想　・非常にアットホームな感じのグループであり感染者が安心して話ができるのではないかと思います。・ＰＷＡ／Ｈどうししかわからないことがやっぱりあるんだと思った。それにこたえられる場があるのはうらやましいというか素晴らしいと思った。

連絡先

ぷれいす東京

〒161 新宿区下落合1－3－6
ハイシティ高田馬場201
TEL 03-3361-8964
FAX 03-3361-8835

ネスト内(食事風景)

Ｎｏ．30	共生へのいちばんの近道はＰＷＡ／ＰＷＨの人々と友だちになること

主　催／ 性を語る会　　講　師／ 北沢杏子　　協　力／ アーニ出版

ねらい

私は各地の性教育研修会の要請で、小・中学校教諭による「エイズの学習」の模擬授業を参観することが多い。そのテーマはなぜか決まって「エイズとの共生」ーとくに小学校では「性交」が教えにくいためか、感染経路などは避けているように思われる。中学校教諭の模擬授業でも、「コンドームの正しいつけ方」などを指導すると、管理職やＰＴＡからクレームがつくらしく、これも登場しない。こうして、「エイズと共に生きる」の授業は、抽象的で、ありきたりな人権教育に終始し、児童、生徒の心に浸みわたるような具体的な形で伝わっていかないように私には思える。

先生たちに望みたいのは（結論からいうと）、「まず行動を！」である。そこでねらいを「共生へのいちばんの近道はＰＷＡ／ＰＷＨと友だちになること」とし、私とＰＷＡのＯさんの話をレジュメにした。

参加者数：６１人

ながれ

前半：ロサンゼルスのGayセンター／教育部門のプロジェクトS•T•A•R•R（SKILLS FOR TEEN AIDS RISK REDUCTION）とフリークリニック／教育部門のプロジェクトABLE（AIDS BELIEFS LEARNED THROUGH EDUCATION)の各４日間にわたる授業を、昨年'95 年の秋に参観したので、スライドを使ってその授業を報告。グループワークに移って「なぜ、コンドームを着けてといえないのか」についてのディスカッションを行なった。

後半：私の山荘に泊まりにきたＯさんと一緒に観たビデオ、ビル・Ｔ・ジョーンズの「アンクルトムの小屋の最後の晩餐」を部分的に上映。ゲイで創作舞踊家のビルが、３年前にエイズで亡くなった恋人との８年間の生活を回想するシーン、そして「彼を失ったとき僕も死にたいと思った」という切実な愛情表現について、「最愛の人がエイズで死ぬ」というグループディスカッションに移った。

参加者全員がスムーズにグループを組み、話しあいの楽しさも体験したようだ。ただ、グループの発表者に選ばれるのが決まって男性というのは一考を要する。男性優位社会の変革を実現するのも、ＨＩＶ／ＡＩＤＳ教育には重要な事柄だからである。

感　想

・ピアカウンセリングのような感じがあって、なんだか心があったかくなりました。もっともっと日本の教育に、こういう「話しあう」機会を増やしていけたらいいなと思います。　・北沢さんのお話を聞いてすごく影響を受けました。学校の授業でも、このようなやり方を取り入れたらいいな、と思いました。来年も絶対にきます。　・すてきな講演、グループワーク、よかったです。ワークショップ形式のセミナーの２本連続コースなんてのも企画してください。　・私はコンピュータ関連の会社で、インターネットのホームページを担当しています。小中高校にコンピュータを導入していく過程で、どんな地域にも情報が平等に伝えられるというインターネットの利点をＨＩＶ／ＡＩＤＳ教育に活かせないかと思っています。　・（はがき）ＡＩＤＳ文化フォーラムではお世話になりました。ＰＷＡ／ＰＷＨと友だちになることの大切さ……感動しました。

連絡先

性を語る会・事務局
〒158　東京都世田谷区用賀3-5-6
TEL 03-3708-7326　FAX 03-3708-7324

Ｎｏ．31	女性とエイズ　ーいやしと再生のワークー

主　催／ 吉永　陽子

ねらい

異性間性交渉において女性は男性に比し医学的に感染を受けやすい存在であるにも関わらず、残念ながらこのことが女性に周知されていないのが現状である。ここでは、女性とＡＩＤＳについてその基本的知識の講義のみならず、小グループによる話会いの場を通じてのより深い理解、ロープレイを通じてのより実戦的スキルの習得、ボディワークによる「傷み」の共感と連帯を体験する。ＨＩＶと共に生きる事から「癒し」と「再生」がはじまる。　　参加者数：３５人（主催者の意図により参加は女性のみ）

ながれ　①オリエンテーション（１０分）主催者からこのセッションの意図について説明。（参加者への一方的な講義形式のセッションではなく、参加者が主体をもつワークショップ形式で行う事、参加者を女性のみに限定した理由等）

②グループワーク１（２０分）：グループ分けとグループメンバーの名前（氏ではなく）紹介ゲーム。主催者側から、グランドルールの設定（ＰＷＡ／Ｈが参加していると想定する、秘密を守る、活発な意見交換を行う等）

③グループワーク２（３０分）：ＡＩＤＳについての知識の確認。グループで「はじめて知ったこと」、「気づいたこと」、「わからないこと」を話合い、これについてフィードバックと主催者側からは短いコメントを行った。

④主催者の講義（２０分）：女性が感染を受けやすいことについて医学的（膣側は、時間、面積、ウィルスの量において感染をより受けやすい事、感染効率は膣粘膜の状態に左右されること）説明及びフェミニズムの必要性を提示した。

⑤グループワーク３（２０分）：人形を用いて、「セックスを拒否する。」「コンドームをつけてもらいたい。」という２つの場面を設定しグループで実際にはどのように交渉していくのかを話あってもらった。各グループメンバーと主催者側とのロールプレイを通してフィードバックをした。

⑥ボディイワーク（２０分）：ＢＧＭを聞きながら、主催者のファシリテートによって瞑想した。心と体から双方のアプローチによって、女性自身が「性的存在」としての自己を認識し、開示し、傷みをわかちあうことで癒されていく過程（healing & empowerment）を同一の空間で体験した。

感　想　・大切なのは自分が女性として何をしてもらいたいのか、主張がどこまでできるかだ。・自業自得論を乗り越えることができた。・感染の有無に関わらず予防が必要であることがわかった。・女性の「痛み」を共有し女性の間にひかれた線を取り除こう。

連絡先

吉永　陽子：医師、医学博士・ＨＩＶと人権情報センター会員
勤務先：長谷川病院内科及び家族機能研究所附属斉藤学診療所
連絡先：〒106 東京都港区麻布十番2-14-5
麻布十番Ａビル　家族機能研究所　内
TEL 03-5476-6550　FAX 03-5476-6557

注）女性のみに参加を限定した理由

ＡＩＤＳの背景には、男性優位社会における女性問題が存在している。それ故男性非難に終始する問題解決型思考の限界をブレイクスルーする必要がある。そのためには、男性によって「刷り込まれた」女性像ではなく、本来の女性自身のアイデンティティの確立が第一歩となるために参加を制限した。

Ｎｏ．32	エイズ　ーいま、何を、どう伝えるかー

主　催／ 岩室紳也　　ゲスト／ 安藤晴敏

ねらい

エイズ／ＨＩＶ感染予防に最も効果があるのは教育であると言われて久しい。しかし、教育現場をはじめとして、未だにエイズ教育の方法論が定まっていない。参加者とともに、学校現場のエイズ教育がかかえる問題点について話し合った。　　参加者数：７６人

ながれ

①自己紹介と本の宣伝

「エイズーいま、何を、どう伝えるかー」（大修館書店）1,200円（税別）

②「エイズ」と聞いて何を思い浮かべるか

自分の中に既に確立されてしまった偏見や差別をまず明らかにする。

③エイズ教育携わっているひとがぶつかる壁について

・父母が「ふしだらなことを教えるな」という。・文化フォーラムのポスターが張られていない。・周りからの理解が得られない。・ＳＥＸの問題にまで関わってしまう。・指導案どおりにはやるが、その他の話し合いなどはやりたくない。

④教育現場に外部講師を呼ぶにはどうすればいいか

予算をしっかり立てる。将来展望をしっかり計画し講師が来なくてもできること、講師が来なくてはできないことを区別する。

⑤高校で行われているＡＩＤＳ教育

①ＡＩＤＳ（後天性免疫不全症候群）。②感染経路。③歴史。④ＡＩＤＳとＨＩＶの違い。⑤自分の健康をどう守るか。

⑥岩室式エイズ教育の実際

詳細は本を参照。コンドームの正しい装着法を参加者に体験してもらった。

感　想

・こういう授業を学校でやってくれれば「ＡＩＤＳ」についてだれもが本当に正しい理解がえられるのに！！

・「恥ずかしい」と思うようなことも、科学的に説明してもらうことで、笑って住ませられるもの、恥ずかしいと言って済まされることではないのだということがよく分かった。

・教え方について参考になった。教え方についても様々な教え方があり、自己尊重を大切にする。受け入れについて考える。

・講演の聞きやすさに驚いた。わかりにくい事は１つもなく、エイズという病気と今話題のＯ－１５７を一緒に説明したこと等、なるほどと思った。

連絡先

岩室紳也

神奈川県秦野保健所

〒257 秦野市曽屋2-9-9

TEL 0463-82-1428　FAX 0463-83-5872

神奈川県立厚木病院泌尿器科

〒243 厚木市水引1-16-36

TEL 0462-21-1570　FAX 0462-22-7836

No. 33	ＡＩＤＳ地方議会

主　催／ エイズアクション

講　師／ 南　定四郎

ねらい

ＡＩＤＳの様々な問題が語られ、問題提起をされるが、それらについてどのように解決したらいいのか？は、全く語られてこなかった。いわば言い放し出会ったが、今回は問題解決のための相手を地方議会に絞って、地方議会に討論をしてもらうために項目をつくりたい。

参加者数：１９人

ながれ

（１）このセクションが始まる前にパソコン通信、ボランティア・センター、会期中の会場にアンケートをして問題を提出してもらうことにした。

（２）セッションにおいては、アンケートを回収して、そこに記載してある項目をボードに掲示した。

（３）会場から発言を求め、項目の妥当性と重複の整理をした。

（４）その結果、まとめられた項目は次の通りであった。

①患者のケアを国レベルで行え、そのために障害者認定をせよ。

②感染経路により生活保障の差別をするな。

③世界レベルでのエイズの情報を提供せよ。

④エイズ診療を断る病院を発表せよ。

⑤「ＡＩＤＳ文化フォーラム」を全国各地で開催せよ。

⑥在日外国人の医療をふやせ。

⑦東南アジアの情報を得る資金を提供せよ。

⑧ボランティア育成のための資金を提供せよ。

感　想（主催者）

このセッションの位置づけは「エイズの政策つくり」であったが、上記の項目でも分かる通り、この大部分が従来から議論されていることの延長に終わった気がする制作提言は、その要求項目を裏付ける調査があり、その実現に向けて具体的名プログラムとコスト計算がなされなければならない。したがって、今回の場合は政策づくりの必要性を喚起した程度に終わったのではないかという気がする。同時に、この政策は地方議会に向けていることを考えると、もっともっと地域における実態が明らかにならなければならない。その点を考慮して次回のやり方を研究したいと思う。

連絡先

エイズアクション

〒162

新宿区市ヶ谷薬王寺70

ブラザー若松301

Ｎｏ．34	石田吉明写真展／いのちの輝き

主　催／ 神奈川県　　1996 AIDS 文化フォーラム in 横浜実行委員会

ねらい

血友病者として、ＡＩＤＳ患者として、カミングアウトしマスコミや医療の現場への積極的な働きかけを続けた故石田吉明氏の写真展です。写真とそこに添えられた自分の生い立ちや、ＨＩＶ感染してからの「思い」を語るエッセイは淡々と力強く、見るものの心に「凛とした生き方」「いのちの輝き」を確実に伝えます

概　要

★会期・平成８年８月６日（火）から８月１７日（土）

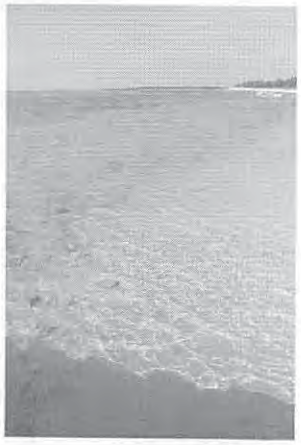
★会場①Ａ会場＝かながわ県民センター１Ｆ展示場（世界のエイズポスター展併設）

②Ｂ会場＝神奈川県国際交流協会（9～11日はAIDS文化フォーラム参加ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ）

★構成・Ａ．Ｂ両会場に各３０点展示（合計６０点）

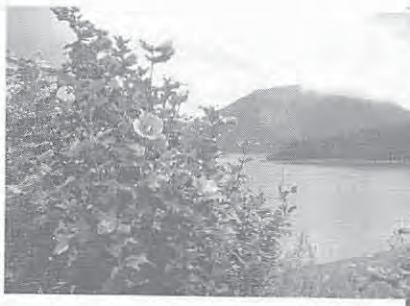
・挨拶と年表は共通として、他は異なる作品とキャプションを展示する。

したたかに生きる

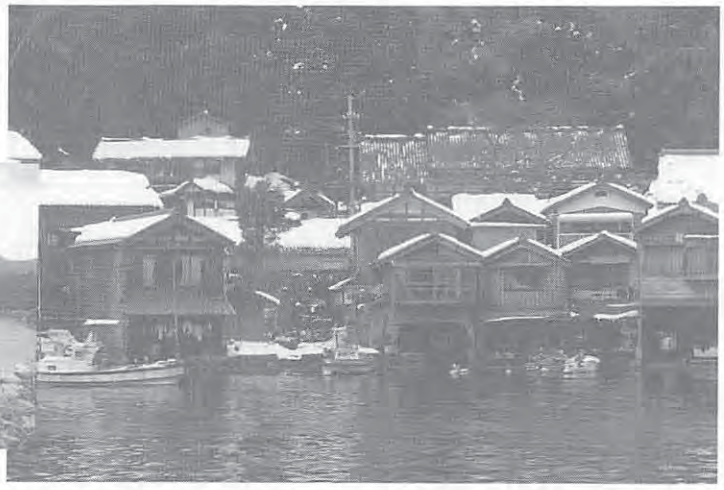


ヒロイズム

道　草



普通の人

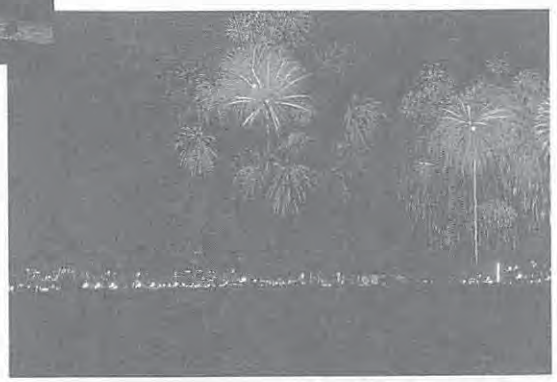


ポ　チ

誓いの休暇

紅葉の秋に

告　知



病者が病者でいられる社会

感　想

・声高に訴えることも必要だが、このような静かな「叫び」も大切だ。（教員23歳・男）
・石田さんのように、前向きに、一日一日を大切に考えて生きたい！（大学生21歳・男）
・生き生きと、精一杯、キラキラ光って生きた人だと思った。（会社員47歳男）
・大阪で２年前に石田さんのお話を聞きました。生をきちんととらえて、いつも大切にしてこられた事を、今日の写真展でも感じました。（公務員43歳・男）
・人間が人間らしく生きられる社会をいつも創っていかなければならない。（50歳・男）
・石田さんの49年は短いが、立派に生きぬいたことがすばらしい。（会社員45歳・男）
・花の写真が美しい。美しさを強く感ずることができるのでしょうか。（55歳・男）
・石田さんの思いが私の心に向かいました。一日一日を大切に生きれる事がどんなに幸福かもう一度、頭と心に語って生きていきたいです。（主婦36歳・女）
・一枚一枚の写真が命を感じられる素晴らしい写真だなあと思いました。(学生18歳・女）
・“今を生きている人”いったい何人いるんだろう。と考えさせられる。(学生17歳・女）
・「ポチ」という詩にすごく胸を打たれた。はずかしいことですが、この詩をみないと彼らの気持ちに気づけない自分がいることが、すごくわかりました。(団体職員24歳・女）
・この写真家がたまたまAIDSだったという感じ。多くの作品を見たい。(学生26歳・女）
・こんなすばらしい写真と文章をじっくり読ませていただき感謝の気持ちでいっぱい。「AIDS」だと名のり出た彼の勇気を、いつも心にとめて励みにしたい。(会社員45歳・女）
・「AIDS」の４文字、「HIV」の３文字の意味が良くわかった。(ヘルパー44歳・女）
・大変色あざやかな美しい写真が多く生きて生命を得ているものは、すべて美しいと感じていたのでしょうか。短い命と才能が惜しまれます。（主婦57歳・女）

連絡先

・石田久恵・清子（石田氏のお姉さん）　TEL 075-643-6301　FAX 075-643-6119
・かながわ県民活動サポートセンター／岡島龍彦　TEL 045-312-1121　FAX 045-312-4810

（参考）かながわエイズボランティア育成講座の概要を紹介します。

かながわエイズボランティア育成講座
１９９６夏期コース

～はじめてボランティアをするあなたが、地域で支える人になって下さい。～

■目　的
ＡＩＤＳについての基礎知識を習得する。
ＡＩＤＳの啓発活動のボランティアを体験する。
個人やＮＧＯとのネットワークを広げてゆく。
地域で支えている人々から実際の活動について学ぶ。

■日　程：１９９６年７月１３日(土)～９月７日(土)（全７回）

■会　場：横浜ＹＭＣＡ会議室（横浜市中区常盤町１－７）
神奈川県国際交流協会会議室（横浜市中区山下町２産業貿易センタービル９F）

■対　象：エイズに関心のある方・初めてボランティアをしてみたい方

■定　員：５０名(先着順)　　■参加費：無料

■事務局：横浜ＹＭＣＡワールド・コミュニケーション・センター
〒231　横浜市中区常盤町1-7
TEL　045-662-3721　　FAX　045-651-0169

■プログラム

	日　時	講座会場	講　座　概　要	ゲスト等
第１回	７／１３(土) 14:00～17:00	横浜YMCA	ボランティアをはじめるための自己理解 Who am I?	國枝欣一
第２回	７／２９(月) 18:30～20:30	横浜YMCA	ＡＩＤＳの基礎知識 患者・感染者としての生活	吉永陽子
第３回	８／３(土) 14:00～17:00	横浜YMCA	啓発活動と仲間同士のカウンセリング 「AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑ」ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ・ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝ	大石敏寛 岩室紳也
第４回 ～ 第６回	８／9･10･11 10:00～20:00 (シフト制)	神奈川県 国際交流 協　会	「1996AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑin横浜」でのボランティア体験。 全体で30項目以上あるフォーラムの中から興味を持つプログラムを３つ以上選択して参加する。文化フォーラム実行委員とともに、運営ワーク（会場準備・受付・連絡調整・進行補助・記録）に参加し、一つのイベントを運営することを実施体験する。	
第７回	９／７(土) 14:00～17:00	横浜YMCA	今後の活動について ディスカッション	西浦うらら 國枝欣一

☆かながわｴｲｽﾞﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ育成講座は、この他に秋コース及び春コースを開催する予定です。

かながわエイズボランティア育成講座感想

病気そのものより人々の無関心＝無意識が差別を生むを思う。ごく普通に生活や社会に入って生きていけたらと願います。10代～20代の人は関心があり、私たち30代は家庭生活や仕事に忙しすぎて、あまりにも無関心ではと思いました。でも実社会では、ほとんどの人がこの年代です。又、子供にも正しい知識を伝えたいと思っています。会社などで話したりしたいと思っています。

（会社員　34歳　女性）

１９９６ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜入場者感想

１９９６ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜は1,600名の入場者がありました。入場者からの感想を一部ですが紹介します。

◆同じ志を持つ人々と出会える場として、活用させていただきました。このような人々にとってこのフォーラムが、何よりも待ち遠しいもの、そして、行かなければ損になるくらい実りのあるフォーラムになればと思います。私はH.I.Voiceの朗読ワークショップに参加し、滋賀でもやろうと決心しました。それほどすばらしかったです。何かを作っていくには多少の苦労があることを今回自分たちで行う朗読劇作りで痛感しております。でも、成功したときの喜びにはかえられません。ホントにＡＩＤＳに関わっている人たちには暖かくてすてきな人たちばかりです。心の栄養になります。ありがとうございました。

（学生　23歳　女性）

◆ＡＩＤＳ文化フォームでは、各々のボランティアが生き生きと活動していました。また、多くの人たちとの出会いもありました。横浜出身者として、すばらしいフォーラムが今後とも継続されることを期待しています。

（薬剤師　42歳　男性）

◆日本でも気軽に市民が参加できる文化フォーラムのようなものは少ないので、このフォーラムを手本にもっと広がっていけばいいと思います。

（会社員　20歳　女性）

◆この間、大学の帰りのバスで、同じ大学の女子学生が「ねえ、エイズとかになったらどうする？怖いよね。」と友人に話していた。とても大きなバス中に響き渡るような声でした。この人はHIVがどうやって感染するのか、そして予防のためには何をすればよいのか、HIV／AIDSって何であるのか、あまり知識がなかったかもしれませんが、おそらくそんな彼女の身の回りにはPWA/Hはいなかったのでしょう。私はＡＩＤＳに関しての情報を得ていくうちに、とても大切なものに気付くことができました。それは思いやりです。このくさい言葉が知識と相俟ってAIDSの理解を深めてくれたのだと思います。これからは、啓発活動を行う一方で、PWA/Hのための情報提供・発信に力を入れることが課題となっているのではないでしょうか。

（学生　23歳 女性）

◆やはり「ＡＩＤＳ、夏、ヨコハマ発信！」の願いがあります。”継続は力なり”だと思いますし、毎年新たに若い人がボランティアとしても参加されることの意義は大きいと思います。主催の方々は大変だと思いますが、頑張って継続して下さい。

（主婦　59歳　女性）

◆HIV/AIDSに係わる人達の話を直接聞けたことは、私にとってとても視野を広げることができたと思います。

（主婦　40歳　女性）

資料編目次

関連新聞記事等

47ページ：AIDS REPORT 23号 「AIDS文化フォーラムin横浜」
48ページ：7月9日（火） 神奈川新聞 「今年も横浜で開催」
48ページ：7月14日（日） 読売新聞 「33の自主講座申し込み殺到」
49ページ：8月7日（水） 神奈川新聞 「横浜から差別克服を」
50ページ：8月10日（土） 神奈川新聞 「性の問題本音で語る」
50ページ：8月10日（土） 読売新聞 「エイズ患者にキルトを」
51ページ：8月10日（土） 朝日新聞 「エイズ知るフォーラム」
51ページ：8月11日（日） 神奈川新聞 「党派超えた運動を」
52ページ：8月13日（火） 神奈川新聞 「差別や偏見なくして」
53ページ：7月27日（土） 横浜リビング 「1996AIDS文化フォーラムin横浜開催」

AIDS REPORT 23号

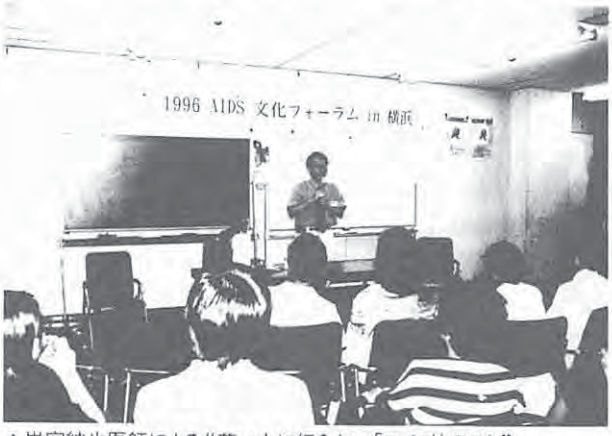
AIDS文化フォーラムin横浜

（1996AIDS文化フォーラムin横浜組織委員会）

8月9日～11日の3日間、横浜市の神奈川県国際交流協会で「AIDS文化フォーラム in 横浜」が開催されました。このフォーラムは、94年に横浜で開催された国際エイズ会議を機会にスタートし、今年で3回目を迎えました。市民による市民のための手作りのフォーラムとして、会場整備や運営、個々のプログラムの実施など、全てがボランティアによって担われていることが大きな特徴です。

今回は、医療、教育、文化、ボランティア、セクシュアリティ、マルチメディア、人権などの12のジャンル、34のプログラムが実施されました。それぞれのプログラムは、キルト作りを通じてエイズについて理解を深めたり、女性同士で性について話し合うなど、さまざまな面からエイズについて考える内容となっています。なかには、プログラムをより深く理解していただくため、参加者の対象を限定した講座もありました。

参加者は3日間で1600人を数え、神奈川県内だけではなく全国から参加があったことから、このフォーラムの広がりがうかがえます。今後も、このようなフォーラムが継続されることが期待されます。



▲岩室紳也医師による“若い人に伝えたい「エイズ」のこと”

エイズ

33の自主講座 申し込み殺到

試み順調に3回目

来月9日から3日間

中区の貿易センター

AIDS（エイズ）への理解を求めて、市民グループやボランティアが自主的に講座を開く「AIDS文化フォーラムIN横浜」が、今年も八月九、十、十一日の三日間、横浜市中区の産業貿易センターを会場に開催される。三回目を迎える今回は、講座の受け付け開始と同時に申し込みが殺到、予定講座数を上回り、断らざるをえないほどの人気ぶりで、同フォーラム組織委員会（吉村恭一委員長）はうれしい悲鳴を上げている。

絵本活用から法律論まで

フォーラムは、すべて市民の手弁当で運営される。今年の講座数は、昨年より三つ多い三十三。講座主催者・団体は三十一。十代、二十代のメンバーも多い。

内容的にも、マルチメディアから法律、文化まで幅広い側面からエイズ問題へのアプローチを目指し、九四年の国際エイズ会議（横浜開催）と同時に始まった試みが順調に発展している。

ことをうかがわせる。

絵本でエイズを解説する講座や、性教育、医療機関とNGOなど、小・中学生から大人まで参加できる内容だ。日本での現状を踏まえ、「女性とAIDS」を始め、参加者を女性、ゲイ、医療関係者らに限定するプログラムもある。

関連行事として、フォーラムと前後して「横浜エイズウィーク96」（横浜市主催）、「夏のレッドリボン月間」（県主催）、横浜いのちの電話の電話相談など（が横浜市内で実施される。

「エイズボランティア育成講座」主催など、ふだんから活動を続けるYMCA総主事でもある吉村さん顧問は、「深刻エイズ問題の表面化などで市民の関心も高まり、エイズについて話し合うことやボランティア活動が日常化している。市民の意識は確実に変化した。ボランティア団体数は把握していないが、増えているという実感がある」と話し、地道な活動が実を結びつつある状況を説明する。

フォーラムは入場無料。プログラムの詳細については事務局（☎045・662・3722）へ。

7月14日（日）　読売新聞

今年も横浜で開催

NGO有志 きょう組織委を発足

エイズ文化フォーラム

来月9～11日

NGO（非政府組織）による市民版エイズ会議として一昨年、昨年と県国際交流協会（横浜市中区・産貿センター九階）で開催された「エイズ文化フォーラム」が今年も同協会を会場に行われることになった。NGO有志が九日、横浜中央YMCA（同市中区）に集まり組織委員会を発足させ、初会合を開く。八月九、十、十一日の三日間の開催を予定。県が共催、横浜、川崎、横須賀市が後援する。

同フォーラムは一九九四年夏、横浜市で「国際エイズ会議」が開かれたのを機に、全国のエイズ関係のNGOが協力して企画したのが始まり。エイズ模擬授業やHIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染者との対話集会など多彩な催しが行われた。

一昨年は八日間で四千三百人、期間を三日間に短縮した昨年も二千二百人が参加するなど、市民の間に定着してきた。

資金難など課題もあったものの、①参加者有志によるボランティア組織「かながわレッドリボンクラブ」が誕生するなど、フォーラムを「手弁当で支えよう」という下地が整ってきた②

今年は横浜の姉妹都市・バンクーバーで国際エイズ会議が開かれることを受けて、NGOの間から「横浜から息の長い地道な取り組みを発信したい」という機運が高まってきたことなどから、三年連続の開催につながった。

組織委員会には横浜YMCA、横浜商工会議所、横浜青年会議所など六団体が参加。NGOを中心に結成される実行委員会を、どちらサポートしていくかなどについて話し合う。また、イベントのプログラムについても検討するが、今年はすでに昨年を上回る三十二のプログラムがエントリーされている。

31のプログラムに2000人が参加した昨年のエイズ文化フォーラム。今年も8月9、10、11日の開催が決まった＝写真は昨年の高校生模擬授業

7月9日（火）　神奈川新聞

8月7日（水）　神奈川新聞

エイズ文化フォーラム

横浜から差別克服を

NGOも全国連携　9日から多彩な催し

一昨年、昨年と連続して横浜市で開かれ「市民版エイズ会議」として定着してきた「AIDS文化フォーラム」（組織委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事）が、今年も九日から十一日まで同市中区の県国際交流協会（産業貿易センタービル九階）で行われる。全国のNGO（非政府市民組織）が三十三のイベントを予定。県が共催、横浜、川崎、横須賀市が後援する。

講座や感染者と対話も

イベントはいずれも参加型。予防へ向けてエイズの正しい知識を伝えるとともに、感染者（PWA＝ピープル・ウィズ・エイズ）、患者への偏見や差別をなくすことを目指す。

九日の「生きる」にはPWAが出席。会場との対話を通じて理解や交流を深める。十日には、画家になる夢半ばの十九歳の時に薬害エイズで亡くなった岩崎孝祥さんの母親・和美さんが「Takayoshiの青春」（二回開催）と題して講演。孝祥さんの描いた作品を紹介しながら感染者の苦悩や共生について話す。

薬害エイズや、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染をめぐる不当解雇訴訟などさまざまな社会問題を扱う講座も開かれる。

「つくる性教育」（十日）では実際に性教育の教材を手作りする。十一日には、エイズ教育に取り組む市民組織「性を語る会」の北沢杏子代表が「共生への近道・PWAと友だちに」をテーマにした模擬授業を行う。またインターネットやパソコンを活用した支援活動を紹介するマルチメディア教室（九日）もある。キルトやテディベアを作りながらエイズ問題を語り合う交流会も行われる。

エイズ文化フォーラムは「横浜からNGOの連携を育てよう」（吉村委員長）と一九九四年に国際エイズ会議と並行して開かれたのが始まり。この時、集まったNGO有志が昨年も八月に開催、三日間で二千二百人を集めた。組織委員会では今年は横浜の姉妹都市・バンクーバーで国際エイズ会議が開かれたことを受け「さらに関心を高めていきたい」としている。

催しなどに関する問い合わせは横浜YMCA内、AIDS文化フォーラム事務局☎045（662）3721。

フォーラムの日程

（カッコ内は開始時間）

【9日】▽開会式（午後零時45分）▽女性のためのワークショップ▽ABCキルトワークショップ▽保健所のAIDS対策（いずれも午後1時）▽絵本で話そうAIDS▽H・I・Voice朗読ワークショップ▽インターネットとパソコンによるPWA支援活動（いずれも午後3時半）▽市民がエイズを考える▽H・I・Voice劇場▽生きる・PWAと語る（いずれも午後6時）

【10日】▽AIDSを生きる人々の気持ち▽つくる性教育▽コンドームを知る（午前10時）▽電話によるAIDS相談デモンストレーション▽PWAと法的サポート▽薬害エイズにみる市民運動（午後1時）▽Takayoshi青春の旅▽テディベアワークショップ▽薬害エイズの問題点（午後3時半）▽Takayoshi青春の旅▽性風俗とHIV／AIDS▽訪問（在宅）サービスを考える（午後6時）

【11日】▽プライマリケアとAIDS▽Safer Sex Workshop for Gay Men▽マザーテレサ・その活動（午前10時）▽HIV不当解雇訴訟の焦点▽PWAを支える医療機関とNGO▽同性愛者の人権とAIDS（午後1時）▽性産業と外国人女性▽地域におけるケアを考える▽共生への近道・PWAと友だちに（午後3時半）▽女性とAIDS▽若い人に伝えたいエイズのこと▽AIDS地方会議（午後6時）▽閉会式、交流パーティー（午後7時半）

8月10日（土）
神奈川新聞

子どもたちにキルトを贈ろうと参加者たちが取り組んだキルトワークショップ＝県国際交流協会

横浜でエイズ文化フォーラム

性の問題 本音で語る

あすまで

エイズについて幅広い視点から市民が考えようという「AIDS文化フォーラム」（組織委員会主催、委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事）が九日、横浜市中区の県国際交流協会（産業貿易センタービル九階）で始まった。一昨年の横浜での国際エイズ会議と並行して始まり、今年三回目。全国のNGO（非政府組織）が参加、十一日まで計三十三の講座を行う。

初日の九日は開会式に続いて女性のためのワークショップ、感染者のトーク、保健所対策、インターネットとパソコンによる感染者支援活動、キルトワークショップ、朗読ワークショップなどが開かれた。

「自分らしく生きる」と題した女性のためのワークショップは、かながわレッドリボンクラブの進行で、女性のみを対象に開かれた。「女性は性に関してどこか受け身だったり、こうあらねばという概念にとらわれているのでは」（同クラブの鹿股久美子さん）という思いから、女性同士で性について語り合い気づき合おうとの趣旨で開催。

「あなたにとってセックスって何？」との問いに始まり、「自分の気持ちを夫や恋人にきちんと伝えている？」「セックスの時自分を解放している？」などの課題に、二十代前後から五十代の女性二十数人が三グループに分かれ、それぞれの体験、本音をフランクに話し合った。同クラブは県と横浜YMCAが行っているエイズボランティア育成講座の出身者たちによるNGO。

キルトワークショップでは、約三十人がキルト作りに参加。HIVに感染したアジアの小さな子どもたちにベビーキルトを贈る運動をしているABCキルトの会の横浜、川崎の会員たちの指導で、二時間の間に縦横五㌢の布を一枚の布に縫い合わせた。ほとんど針を持ったことがないという男性の大学生や会社員も交じり、「エイズを考える機会にしようと思う」などと話していた。

同フォーラムに併せ、昨年四月に亡くなった石田吉明さんが血友病患者として、エイズ患者として生きた思いをつづった写真展（十七日まで）も、同会場で開かれている。フォーラムは十、十一日も午前十時から午後七時半まで、さまざまなテーマで開かれる。自由参加、無料。

8月10日（土）
読売新聞

ふれあい

AIDS文化フォーラムin横浜

エイズ患者にキルトを

横浜市内などの市民グループが主催する「AIDS文化フォーラムin横浜」が九日から、横浜市中区の産業貿易センタービル内の会場で始まった。

海外のエイズ患者にキルトを贈る活動を続けている「ABCキルトの会横浜支部」のメンバーによる講習会が行われ、主婦ら三十人が色とりどりの布切れを使い、見事なキルトを縫い上げた。

HIV（エイズ・ウイルス）感染者による講演会や、保健所の担当者による説明会なども行われた。

フォーラムは十一日まで三日間の日程で、各種の講演会などが行われる。問い合わせは同フォーラム事務局（☎045・662・3721）。

AIDS文化フォーラムのキルト講習会

党派超えた運動を

エイズ文化フォーラム 討論で課題を共有

薬害エイズの犠牲者 岩崎さんの作品展も

「AIDS文化フォーラム」(組織委員会主催、委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事)は十日、横浜市中区の県国際交流協会(産業貿易センタービル九階)で前日に引き続き、十二の講座・ワークショップなどを通しエイズについて考えた。

「薬害エイズにみる市民運動」と題して開催された集いは、HIV(エイズウイルス)訴訟を支える会横浜が進行役を務め、関東を中心に活動しているNGO(非政府組織)メンバーら約五十人が参加。まず一九八五年の薬害エイズ被害発覚から今年三月のHIV訴訟和解成立までの運動の歴史をビデオで振り返り、「支える会」学生代表の高橋真紀さんら高校生一人を含む四人が運動に参加した動機、これまでの経過を踏まえての感想、今後の課題などについて話した。

このなかで高橋さんは「世論を動かすため、若い人たちの運動をつくりたいと思った。その後、運動の中心になり、労働組合の人たちにお願いにいくケースがあり、運動そのものに党派色が生まれたのが残念。そうなると一般の人が引いちゃうので大変でした」と話した。

また別の会場では、画家になる夢を薬害エイズにより断たれ、十九歳の若さで亡くなった岩崎孝祥さんが生前に描いた水彩、油、素描十点なども展示され、参加者の関心を集めていた。

フォーラムは一昨年の横浜での国際エイズ会議と並行して始まり、「市民版エイズ会議」として定着、今年で三回目。十一日も同じ会場で午前十時から午後八時まで十二のイベントと交流会が催される。

市民運動に参加した動機や感想、今後の課題などについて若者4人が率直に語った

8月11日(日)
神奈川新聞

エイズ知る 区フォーラム 中あすまで

エイズの理解を広げるためのエイズ文化フォーラムが九日、横浜市中区の産貿センター九階にある県国際交流協会会議室で三日間の日程で始まった。ボランティア団体が中心になって三十三の講座を設け、エイズで死亡した少年の家族や医師らも参加して課題別に話し合う。

参加無料だが、「男性同性愛者のみ」「女性のみ」「十五歳以下は保護者同伴」などと対象者を絞った講座もある。

横浜商工会議所、かながわともしび財団などでつくる組織委員会(委員長・吉村恭二・横浜YMCA総主事)と県の共催。二年前の国際エイズ会議をきっかけに始まり、今年が三回目。昨年エイズで亡くなった男性の写真展も開かれている。

問い合わせはフォーラム事務局(〇四五―六六二―三七二一)へ。

8月10日(土) 朝日新聞

8月13日（火）　神奈川新聞

差別や偏見なくして

AIDS文化フォーラム　対策など意見交換

横浜

横浜市の県国際交流協会を舞台に開かれていた市民版エイズ会議「AIDS文化フォーラム」は十一日、三日間で千六百人の来場者を集め閉幕した。全国から参加したNGO（非政府市民組織）が三十四のプログラムを展開、交流を深めた。九四年の国際エイズ会議を機に始まり今年で三回目となるが、エイズの正しい知識を深め差別や偏見をなくしていく試みとして定着したようだ。

「来年も続けて」の声も

閉会式で広瀬誠実行委員長（横浜YMCA常議員）は「エイズ問題に関する領域は広がっている。フォーラムを機に、さらにネットワークを広げてほしい」と総括した。

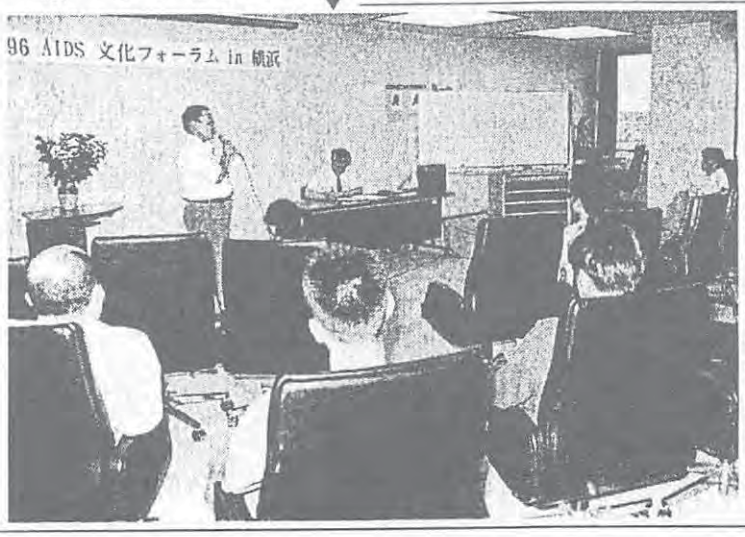
企業などの関心が低下する中、決して楽な財政事情ではなかったが、七十人あまりの市民ボランティアに支えられた。NGOからは「こうした息の長い取り組みは全国でも数少ない。来年も続けてほしい」とエールが送られた。

最終日の十一日に開かれた「AIDS地方会議」では、フォーラムを運営したNGOの代表ら二十人あまりが、来場者アンケートなど全国から寄せられた声をもとに今後のエイズ対策について意見を交換した。①インターネットを用いて感染者、患者の相談に応じるとともに、医療機関など情報提供を行う②患者の受け入れに前向きな医療機関に対して助成金を出す―など具体的な提案が相次いだ。

なお同会議では、秋をめどに声明をまとめ、関係行政などへ提出することとした。

また、エイズ問題にくわしい県立秦野保健所医師・岩室紳也さんの講演には県内中学、高校など教育関係者ら約八十人が参加した。

「授業でエイズについて取り上げたところ、生徒の父母から『ふしだらな事を教えるな』と批判を浴びた」（女性教諭）など教育現場が抱える悩みが明かされた。



今後のエイズ対策について話し合った「AIDS地方会議」が開かれるなど、3回目となったエイズ文化フォーラムには1600人が参加した＝横浜市中区、県国際交流協会

興味のあるジャンルを見つけて参加しよう！

「1996ＡＩＤＳ　文化フォーラム　in　横浜」開催

昨年のフォーラム風景

いま、社会問題になっている〝エイズ〟。でもどこか他人事のようにとらえている人も多いはず。しかし〝エイズ〟は、特定の人だけの病気ではなく、エイズウイルスに感染する可能性はどんな人にもあるのです。未来の自分のために、家族のために、もっとみんなで関心を持たなくてはいけないのではないでしょうか？　横浜市で開催される「1996ＡＩＤＳ　文化フォーラム　in　横浜」は、興味を持ったジャンルだけ自由に参加できる、市民のためのエイズフォーラムです。まずは、最初の一歩として、どんどん積極的に参加してみましょう！

1994年、横浜で開催された国際エイズ会議に合わせて、1回目の「ＡＩＤＳ　文化フォーラム　in　横浜」が開かれてから、今年で3年目を迎えます。

このフォーラムは、〝市民に開かれた会議を市民の手で〟を合い言葉に、「エイズ問題は、誰かの出来事ではなく、自分たちのこととして、市民全体で取り組んで行こう」と始められました。運営は、すべてボランティアによるもの。

今年の「1996ＡＩＤＳ　文化フォーラム　in　横浜」のテーマは〝ともに生きるから連帯へ〟で、8月9日（金）～11日（日）の3日間開催されます。次のようなジャンル別にさまざまな講座（左表）を用意。

①社会とＡＩＤＳ
②文化とＡＩＤＳ
③マルチメディアとＡＩＤＳ
④ボランティアとＡＩＤＳ
⑤心とＡＩＤＳ
⑥生きる
⑦人権とＡＩＤＳ
⑧セクシュアリティとＡＩＤＳ
⑨女性とＡＩＤＳ
⑩Ｈ★とＡＩＤＳ
⑪教育とＡＩＤＳ
⑫医療とＡＩＤＳ

講座がどのジャンルに属するかは、左表に各番号を表示しましたので参照を。また「自分でこんな講座をやってみたい」という人には、プログラム中の講座を新たに主催することも可能です。

※入場の電話予約は行っていません。当日直接会場へ。

また、プログラムをより深く理解してもらうため、対象者限定のものがあります。詳しくは問い合わせを。

主催　1996ＡＩＤＳ文化フォーラム　in横浜組織委員会
共催　神奈川県
会場　神奈川県国際交流協会会議室（横浜市中区山下町2、産貿センタービル9階）
入場料　無料
問い合わせ　横浜ＹＭＣＡ
☎045（662）3721
ファクス　045（651）0169

時間	会場	9日（金）	10日（土）	11日（日）
10時00分～12時00分	A		"AIDS"を生きる人々の気持ち（HIVと人権・情報センター）⑤	プライマリケアとAIDS（HIVと人権・情報センター）⑫
	B		つ・く・る・性教育～"性"を語るためのグッズ製作～（横浜エイズ勉強会）⑪	Safer Sex Workshop for Gay Men（ぷれいす東京）⑬
	C	開会式（12時45分～13時00分）	浴室をこえた？（月指定）（SAY NETWORK っぽいかもしんない）⑩	マザーテレサ・その活動（グループPAZ）⑥
12時00分～13時00分		休　憩		
13時00分～15時00分	A	自分らしく生きる～女性のためのワークショップ～（レッドリボンクラブ）⑧	電話によるAIDS相談のデモンストレーション－ロールプレイによる－（横浜いのちの電話）⑮	従業員の医療情報は誰が管理すべきか？（HIV不当解雇訴訟支援団）⑦
	B	ABCキルトワークショップ－キルトを作りながらエイズを考える－（ABCキルトの会）⑫	PWA/Hと法的サポート（「エイズ予防法」を考える会）⑦	PWH/Aを支える医療機関とNGO（AIDS & Society研究会議）④
	C	保健所のAIDS対策（あのね広場）⑫	薬害エイズにみる市民運動（HIV訴訟を支える会横浜）④	同性愛者の人権とAIDS（レズビアン・ゲイ・ネットワーク）⑦
15時00分～15時30分		休　憩		
15時30分～17時30分	A	絵本で話そうAIDS（あのね広場）⑤	Takayoshi青春の旅（HIVと人権・情報センター）⑫	性産業と外国人女性（横浜YWCA・多摩YWCA）⑨
	B	H・I・Voice戯曲ワークショップ（H・I・Voice・ACT）⑫	テディベアワークショップ（メモリアル・キルト・ジャパン）⑫	地域におけるケア考える（ぷれいす東京）④
	C	インターネットとパソコンによるPWA/H支援活動（ライフ・エイヌ・プロジェクト「LAP」）⑬	薬害エイズって何が問題なの（薬害エイズを追及する市民ネットワーク）⑫	共生への いちばんの近道はPWA/PWHの人々と友だちになること（北沢杏子）⑪
17時30分～18時00分		休　憩		
18時00分～19時30分	A	市民がエイズを考える（AIDSネットワーク横浜）①	Takayoshi青春の旅（HIVと人権・情報センター）⑫	女性とAIDS－いやしと再生のワーク－（吉永陽子）⑭
	B	H・I・Voice劇場（H・I・Voice・ACT）⑫	性風俗とHIV/AIDS（Campus AIDS Interface）①	エイズ－いま、何をどう伝えるか－（浴室神話）⑪
	C	生きる－positive?－（パトリック & 神也）⑮	訪問（在宅）サービスを考える（AIDSケア・プロジェクト）④	AIDS地方議会（エイズアクション）①
				閉会式・交流パーティ（19時30分～20時00分）（C会場：参加費無料）

プログラムの内容は7月3日現在のものです。都合により変更、中止の場合もあります。

「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施報告

1．実施概要

(1)日　時：1996年８月９日～11日
(2)場　所：神奈川県国際交流協会会議室、他
(3)主　催：「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」組織委員会（７名）
(4)共　催：神奈川県
(5)後　援：横浜市、川崎市、横須賀市
(6)実　施：「1996 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実行委員会（１３名）
(7)参加者数：約1,600名
(8)ボランティア数：約70名

2．組織委員会

唐崎　旬代（横浜YWCA）
小久保一利（かながわともしび財団）
濱尾　文郎（カトリック横浜司教区）
吉村　恭二（横浜YMCA）
川本　譲次（横浜商工会議所エイズ問題対策懇談会）
富安　浩（横浜いのちの電話）
山口　宏（横浜青年会議所）

3．実行委員会

岩室　紳也（神奈川県桑野保健所）
笠原　隆（横浜AIDS市民活動センター）
鹿股久美子（かながわレッドリボンクラブ）
小島　隆士（横浜いのちの電話）
長沢　勲（横浜YMCA）
広瀬　誠（横浜YMCA常議員）
吉永　陽子（医師）
岡島　龍彦（かながわ県民活動サポートセンター）
金澤　英樹（横浜市海外交流協会）
久慈　美代（横浜YWCA）
近内　康司（神奈川県国際交流協会）
西浦うらら（ボランティア・コーディネーター）
細井　保路（カトリック横浜司教区）

4．ボランティア

金田陽治　堀口里江　斎藤奈美枝　市原普子　高倉幸子　高津寿美江　金内真二
金田由美子　曽根絵理子　大谷るみ子　見山陽子　黒川紘子　下野治代　宮崎史康
斉藤愛　石田朝美　伊藤紀子　島田香　田崎智宏　桐戸可奈　端坂幸子　佐藤恵子
井上三香　横山純恵　星原たつこ　藤江直樹　長崎功子　岩堀美恵子　千代木ひかる
佐野智子　菊岡ノンコ　宮本啓子　小野葉子　務台法　木部崎彩　成田右子
安西耕　重村英子　辻井美穂　青戸智浩　松山孝義　桑幡香子　金子祐子　石原誉一
曽我部美由紀　加藤一雄　内田早苗　伊藤陽三　鈴木瑞江　三田千珠子　宮本信子
小熊恵里子　浅山道子　相馬政子　佐藤美紀　桑島弘成　松永千春　松本恵美子
杉山靖　伊藤美穂子　神山幸恵　佐藤正子　関口豊樹　他

5．報告書作成委員会

岩室紳也 岡島龍彦 笠原隆 鹿股久美子 長沢勲 西浦うらら 矢部尚美 吉永陽子

6．その他

(1)資金援助：カトリック山手教会
　　カトリック横浜司教区福祉委員会
　　横浜商工会議所エイズストップ支援金
(2)会場提供：神奈川県国際交流協会
(3)備品提供：横浜市海外交流協会
(4)物品提供：（株）ユニマットコーポレーション（飲料）
　　ＵＣＣ上島珈琲（株）（コーヒー及びコーヒーメーカー）
　　（株）エフ・ヴィ・コーポレーション（飲料）
　　キリンビール（株）横浜工場（飲料）
　　小岩井乳業（株）（飲料）

「1996 AIDS文化フォーラム in 横浜」実施報告書

発行日　1997年 3月 1日

発　行　「1996 AIDS文化フォーラム in 横浜」組織委員会

編　集　「1996 AIDS文化フォーラム in 横浜」報告書作成委員会

事務局　〒231 横浜市中区常盤町1-7 横浜YMCA内
ワールド・コミュニケーション・センター
TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

ともに生きる
から連帯へ

市民が作るAIDSフォーラム。あなたからのメッセージをひとりでも多くのひとに。